Title	明治六年
Citation	北大百年史, 史料(一), 77-139
Issue Date	1981-04-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/30092
Туре	bulletin (article)
File Information	siryo1_p77-139.pdf



明治六年

## 六二 律法教師雇入取止の旨通知

弐拾人高北海道より為差登候様御申越ニ付先ツ以札幌より九人当管其御地女学校生徒之儀最初札幌方面より拾人函館方面より拾人都合

六

函館よりの女学校生徒差出方に付掛合

内より六人都合拾五人高人撰為差登候未五人高不足ニ付此分猶為差

越候趣も有之候所次官殿帰京之砌女学生徒為差登方之儀へ是迄ニ而入校見込も有之由ニ而否申入候様斎藤英俊帰函之節学校掛より申含登候心得ニ候哉北海道ニ相応之者無之候ハ、東京おいて右人高丈ケ

様致度此段及御懸合候也合候方ニ而可然哉当方取計方之都合も有之候間否早便御申越有之候先ツ差扣置候儀ニ有之右者弥以人高丈ケ為差登可然儀ニ候哉又ハ見余、見合候様御申置之趣も有之ニ付追々入校望之者も有之候へとも

## 杉浦中判官印

追而建築掛今泉長保長女次女入校顧別紙之通願出候所当人共ハ其東京上局御中

第一月六日

\* 女生上游之義ハ北地住居之者ヲ勧ンガ為ナレハ住京之児

地居住之由ニ候間御都合次第御処分有之候様致度此段も申入候也

女ハ一般ノ論ニ係ル可シ⑪(黒田)⑪

〔注〕 別紙を略す。

〔道〇五七五六〕

法国巴里リウ、デ、ラ、ペー十二番

日本公使館鮫島君

律法教師ヲ要セス故ニ此事ヲ前ニ姓名ヲ揭タル人々ニ告ケ若シ約条1ト一人雇入之儀相頼ミ貴下幷ニ寺島森へ頼状を送リタリ今此等ノ

司法省キシラ幷ニツルダ欧行之節当使ノ為めローエル一人アドホケ

前文寺島幷ニ森氏ニ電報セラレヨシタランニハ其約書引戻ノ事ヲ取計ハレヨ

否ヤ貴答アレ

日本東京千八百七十三年第一月九日

黒田開拓次官

百七十三年第一月九日

〔道〇五七二六〕

第弐号

六三 露国留学生市川文吉を官費留学生に採用方伺

魯国留学生市川文吉

右之者義彼地着已来格別勉励鉱山学追々熟達殊二人材之趣二相聞候

当分同国滞在被仰付候様仕度此段奉伺候也者現今当使必用之者ニ付開拓使七等出仕ニ御採用開拓事業等為取調処今や北海諸州之鉱山開採之方法等夫々御布達相成候折柄右文吉ニ

明治六年一月九日

開拓次官黒田清隆

六五

農業現術生徒修業後の開拓従事年限に付同(進)

正院御中

[道一〇七〇二]

語学及び普通学教師として外国人二名雇入の儀伺

六四

一ノ三十九号

仏朗西ワールノヲリウール

**亜米利加華盛頓府** 

スへ

フ 1 ŋ

アルボルトヒューツ

学幷普通学教師書面両名幸と御国地在留ニ付当一月より六月三十日 務之学課師員夫々御雇之儀壬申正月伺済之処差向生徒階梯之ため語 北海道札幌庁下学校落成迄之処東京ニおゐて生徒教育として開拓急

迄六ヶ月間当使定額金之内ヲ以御雇入仕度此段奉伺候也

開拓次官黒田清降

明治六年一月十九日

正院御中

明治六年一月廿七日」 印 (正院之印)

[道一〇七 1 1]]

次官印(黒田)

幹事⑪(吉村)⑪(田中)

五等出仕(即(西村)

学校掛⑪

庶務係(印(時任)(印

農業係印(千葉)印(加納)

七等出仕⑪(荒井)⑪(調所)

東京ニ於テ官費ヲ以農業現術修行被仰付置候生徒之輩成業之上北海

仕度此段奉伺候以上

準シ成業之上開拓ニ従事スルコト十ケ年ト相定兼而御達置相成候様

道ニ於テ開拓ニ従事致候年限之儀者東京仮学校官費生徒之規則ニ照

一月廿五日

(部(黒田)(部(西村)

貸費生徒十ヶ年自費生徒五ヶ年此年限ハ成業ノ上必ス北

海道中ニ在テ其ノ自業ヲ勤メ開拓使ノ命令ヲ背クヘカラ

サル事

右ハ壬申十月於札幌学校ノ仮規則相設候ケ条中ニ有之候

間此段相達候尤農ノ現術修行申付候者モ右ノ規則ニ同様

但シ本人及ヒ請人ノ証書規則之通可相請取事

明治六年一月廿八日

次官

[注] 冒頭欄外に「一月三十一日写ヲ以農業掛へ達ス」

との朱書あり

〔道〇五七五一〕

雇外国人ライマン、マンロー、アンチセルの職務の件

セネラールホーレシケフロン君

明治六年二月七日東京ニ於テ呈

昨五日御談判致候通ライマン氏ヲ北海道地質鉱属等ノ測量方ニ任

マン氏彼地巡廻手続等ハ協議ノ上追テ相決可申候謹言化学分析等ヲ専務ト可致此旨三氏へ貴下ヨリ御達有之度存候且ヲイシモンルー氏ヲ其補助タラシメアンチセル氏ハ仮学校生徒ノ教授幷

開拓次官黒田清隆

道○五七四二〕

六七 北海道の地質調査その他に付黒田開拓次官とケプロン

明治六年三月十二日黒田次官教師ケプロン」ト会話

書中ニ概略ヲ認メタレハ宜ク御勘考玉ワルヘシサリシニ眼病ニテ引籠ミ居リ其代人ニ北垣国道ヲ同伴セリ尤モ此郻先日来屢々商議ヲ経シ地質鉱山等ノ儀決議ノ為榎本武揚同行ノ筈

■最高比別語・皆国、質をはとして、Refer せいにいてたいであれ、別に好手段ヲ得タル者ト云フヘシを1の最初へ全道一般ノ心得ナレハ専ラ夫ノミ申述タリ然ルニ此書中ノ

等ハ猶協議ヲ尽シ書面ニテ貴覧ニ供スヘシの然ラハ今年ノ儀ハ此ニ決シ石狩以南ヲ「ライマン」ニ命シ精密ナクニ庶幾カラン

**少大略引足へクト思へリ** 

シニ其利益甚多シ就中鰊鮭鱈等ノ如キハ最モ利益多キ者ナリハ夥多ノ財本ヲ得又其業モ盛大ニ至ルヘシ米国ニテ年来此事ヲ試北海道ハ魚類ノ多キ所ナレハ従来ノ製法ヲ改メ外国へ輸出スル時

行渉リ兼ネ今日マテ遅延セリ猶速ニ施行ノ目的ヲ定ムヘシの此等ノ事モ既ニ評決シ居レル事ナレトモ多端ノ場合ニテ何分ニモ

⑦地面ノ測量ハ誰ニ命セラルヘキャ

ハ「ワツソン」ニ任ジタキ者ナリ 郷クラク」ヲ上京セシメ「ワツソン」ノ代ニ学校ノ教官ヲ命シ測量

の夫レハ至極宜シカルヘク学校モ当分ハ格別進歩ノ生徒モ見得サレ

木材輸出ノ儀ハ如何御決定相成ルヘキャ

少キ教師ヲ雇入レラル、モ宜シカルヘシ実地上ノ事業ヲ命セラル、ハ予ニ於テモ希望スル所ナリ且給料ノハ「クラク」ニテ十分行届キ可申ワツソン」ハ学術慥ナル者ナレハ

ハ農学ノ著書多キ人ナリシニ晩年ニ至リ紐育ノ近傍ニテ広大ナル、米国ニテ大統領ト為ルヘキ評判ノアリシ「ホーレシグレーリー氏⑦書籍上ニテ講習シタル人ヲ現術ニ用ル時ハ半文銭之価ナキ者ナリ

物相撰ミ申スヘシ

**す此表ニ留メ置キテハ全ク無用ナレハ「フレキストン」ノ器械ヲ木材ヲ鋸割シ小樽等ヘ相廻シタラハ両様ノ便ヲ得ヘシ且「ホルト」のブレキストン」ノ器械ハ東海ニ据へ札幌ノ器械ヲ以テ石狩近傍ノ** 

●同人ハ先以テ札幌へ出張致サセ同所ノ器械ヲ取扱ワセ申スヘシ速ニ設立シ同人ニ其取扱ヲ命セラレテハ如何ナルヘキヤ

⑦三週間モ前ニ心掛ヲ命セラレズハ諸事調ヒ難タカルヘシ

⑦此レハ今般京都ノ博覧会へ持越スヘキ物品ノ表記ニテ其内ニハ開郷何レ来月上旬ニ相成ルヘク明日調所一同取極メ申スヘシ

時心得ニモ相成ヘシトテ桑港在留領事ヨリ相贈レル書面ナレハ閣拓須要ノ器械等モ有之尤モ会散ノ後売却ノ筈ナレハ若シ購入等ノ

下御一覧下サルヘシ

〔道〇五七四二〕

六八 仮学校閉校に付金銭器械等引渡の達

舎監取締教官幷生徒之儀者早々退校可致事

加藤政敏

柳生恒政

科ニ進ミシ者ト相類ス夫レ専門科ノ生徒或ハ兵学ニ従事シ或ハ海軍

ノ術ヲ習ヒ其学フ所既ニ実事ニ渉ル者豈ニ文部ニ於テ一ニ之ヲ管理

用翁教官弁生役之像者早々

但拝借之書籍等者返上可致事

明治六年三月十四日

黒

黒田清隆

[農〇一三]

サル者へ公使及教師ノ試験保証ニヨリ之ヲ召還シ厳ニ処分ヲ加へ且同視ス可ラス然レトモ其愚鈍怠惰ニシテ一技一芸ノ事ヲモ成ス能ハスルヲ得ンヤ要スルニ名実両ナカラ他ノ生徒ト相異ナルヲ以テ一例

海外留学生処分に付意見上申

六九

第二十一号

リ允当今後生徒ノ処置然ラサルヲ得ス惟本使発遣ノ生徒ニ至ツテハ文部省学制及ヒ伊藤博文英博士ノ建言ヲ熟考スルニ其論スル所固ヨ海外留学生徒処分云々御下譲ニ付意見左ニ上陳仕候

前ニ再度陳述セシ如ク其実一技一芸ノ事ヲ習ハシムル為ニシテ文学

擅ニ自ラ科ヲ転シ師ヲ易ル等ノ弊ハ其方法ヲ立之ヲ禁戒スヘシ其管

理ニ至ツテハ従前ノ如ク本使ニ於テスル障碍ナカルヘシト奉存候也

四月五日

正院御中

開拓次官 姓 名

[道一〇七〇1]]

東京上局御中

東京七号

さり

露学生徒本多銀次郎外一名出京願出に付伺

杉浦中判官⑩

候ニ付今回長谷部少判官方江掛合置候処本多銀次郎外一人ハ同様樺 当処寄留魯学生徒三名之内壱人樺太江龍越魯学修行致シ度願書差出

太行不相願東京表江罷出別紙願書之通充分魯学修行致シ度段願出候

既ニ出京ニも相成候処其実帰函も致ス間敷願之伝聞も有之魯教士ア 見据無之且御用掛緒方惟孝先日老母之病気之趣ヲ以帰省願出承リ届 就而者当所学校改正之見込先便申進候通ニ而迚も当分魯学迄可行届

タメニ青年輩空敷光陰ヲ消シ候而者其責誠免る能わす痛心不啻候依 ナトリー方江通学而已ニ而者進歩も無覚束右ハ当処学制確立セサル

テハ御地江差出候テ本人素願之如ク勤学可相成哉御賢考之上至急御

回答有之度候也

明治六年四月十一日

[別紙]

願 書狂

周日間三次魯僧アナトリイより伝習仕居候得共是も此程宗祖之祭辰 先般緒方惟孝帰省後日々修業ニ差支居候処今ニ帰函無之其上漸ク一 ニ係リ長々休業ニ相成居候ニ付愚考仕候処当今東京ハ田中緒方ハ勿

も東京寄留仕候間彼是比較仕候得者当地ニ於テ一人之僧より極少時 論魯国官員之外僧ニコライ幷ニ私共最前伝習仕候書記官マレンダ等

ダも有之其上若干之魯人寄留仕候間当地ニ而魯学ニ従事仕候よりハ 間之教授を仰候よりハ東京ニ於テ田中緒方より伝習仕候上右マレン

東京二而從事仕候方判然相優候様奉存候間何卒東京表二而修業相成 候樣仕度此段奉願上候頓首謹言

第四月廿九日

高木平三郎印

本多銀二郎⑩

庶務係御中

魯学教師サルトフ御雇入相成候ニ付生徒ハ従前之通タル 旨返答之事

輯者は願書を本件の別紙としているので、それに

願書の日付は後日のものであるが、この史料の編

倣った。

明治六年六月十三日

七一 仮学校則例

開拓使仮学校則例

シメントス冀クハ此校ニ入ル「レノ誤カ」

ニシテ之ヲ札幌ニ移シ将ニ実地上其材ヲ育シ以テ開拓ノ盛業ヲ賛ケ ケ教師ヲ海外ニ招キ生徒ヲ延キ専ラ農工鉱諸学科ヲ教へ益規制ヲ大

付 右に付回答

函二百十四号

杉浦中判官殿

西村正六位

為基

時任

函館寄留魯学生徒本多銀次郎外一人東京へ遊学致度旨願出候ニ付右

願書御廻シ御掛合之趣致承知候右者今般魯学教師サルトフ御地学校 御雇入相成候二付向後教育方不行届之儀無之等仍而魯学生徒他所

遊学之儀者御差止相成可然其旨夫々御申諭有之度此段及御答候也

[道〇五七五六]

候

校門ヲ看守シ出入ヲ検ス

医 官 生徒ノ疾病ヲ診視治療スルヲ掌ル

事 務 諸公文ヲ受付シ校中一切会計営繕等ノ事ヲ掌ル

校内取締 小使ヲ督シ校中ノ洒掃及火炉燈燭等ヲ点検スルヲ掌ル

玄関語 候人書信等ヲ通伝ス

校務定則

第一条

然ル後入校ヲ許シ之ヲ予科生徒トス満二年ノ後大試験ヲ為シ専門学 生徒ハ十二歳ョリ十六歳マテノ者ヲ択ヒ身体ノ検査学業ノ試験ヲ経

課ニ就カシムル事

学校ハ徳ヲ成シ才ヲ達スルノ地ニシテ邦政ノ本ナリ今本使学校ヲ設

ヘキ事 生徒学才ニ乏シク専門学課ニ就ク能ハサル者ハ農工現術ヲ学ハシム

教 授

助

校

長

使ニ稟議シテ之ヲ処分シ其常例成規アル者ハ便宜施行ス 校中諸官員ノ管督シ一切ノ校務ヲ判決スルヲ掌ル凡事務本

教授ヲ助ケ生徒ヲ教導シ其勤惰ヲ検シ講堂各舎ヲ監視シ及 生徒教育ノ事ヲ管シ学級ヲ定メ課程ヲ立ル等ノ事ヲ掌ル

教

書籍器械ノ事ヲ掌ル

級長生徒ヲ撰シ 生徒ノ起臥体操等ノ事ヲ検察スルヲ掌ル

第二条

第三条

生徒成業ノ後ハ北海道ニ編籍シ五年間開拓ニ従事スヘシ且其年限中

寄留スルハ本人ノ願ニ任スヘシト雖トモ其籍ハ終身他へ移ス可カラ

ト雖トモ官ノ都合ニ依リ之ヲ止ムルコトモアルベシ尤満期後他処へ

サル事

第四条

課業時間ハ日之長短ニ因テ掲示スル事

第五条

毎歳二次ノ試業ヲ以テ等級ヲ改定シ且毎月小試験ヲ為シ一級中ノ序

次ヲ交換スル事

第六条

生徒疾病アツテ治ヲ受ルトキハ医薬等一切給与スベキ事

第七条

ス若シ死去スルモノハ埋葬ノ法ヲ行フ或親戚其家ニ於テスルヲ請フ

生徒病舎ニ在リ病勢危篤ナルトキハ之ヲ校長ニ申シ其状ヲ親戚ニ報

トキハ之ヲ許シ其資用ヲ給与スル事

第八条

之ヲ診シ其旨ヲ校長ニ具申スベキ事

毎朝夕生徒各其舎外ニ整立セシメ教員医員之ヲ検閲シ其病アル者ハ

第九条

伝染病ニ罹ルモノアレハ医官速ニ校長ニ申シ之ヲ別室ニ移スベキ事

第十条

疾等ノ憂ヲ防クベキ事

水曜日毎ニ医官各室ヲ巡検ン人ノ健康ニ害アル事アレハ之ヲ禁シ疫

第十一条

当直ノ教員ハ必ス生徒ト食ヲ共ニシ其生熟良否等ヲ検スベキ事

第十二条

毎夜九時三十分当直ノ教員各舎ヲ巡視シ第十時講堂及ヒ行廊ノ火燭

ストーフ」等ヲ点検スベキ事

第十三条

毎朝小使ニ命シ校中ヲ洒掃シ黄昏ニハ講堂及行廊等ノ火燭ヲ点セシ

ムベシ且ツ之ヲ滅スルハ夜ノ長短或ハ課業ノ都合ニ依リ其時限ヲ定

生徒規則

第一条

厚フシ校長教員及ヒ級長ノ命ニ背ク可ラサル事

信義ヲ本トシ法則ヲ守リ学業ニ勉励シ長ヲ敬シ幼ヲ扶ケ互ニ礼譲ヲ

人若シ無礼ヲ加フル者アレハ之ヲ教員ニ訴へ互ニ争論喧鬧ス可ラサ

ル事

第三条

ル可ラサル事

講堂出席ノ時限ニ後ル可ラサル事

第四条

正課中講堂ニ於テ許可ヲ経ス猥リニ其席ヲ離ル可ラサル事

第五条

毎朝己ノ室内ヲ掃除シ衣服器物ヲ整頓シ務テ清潔ニス可キ事

第六条

毎朝夕各其舎外ニ整立シ教員医員ノ検閲ヲ受ク可キ事 第七条

校内ニテ高声談話或ハロ笛ヲ吹ク等其他争論喧鬧一切不法ノ挙動ア

校中書籍及ヒ器物衣類ヲ猥リニ損傷シ或ハ障壁ニ戯書ス可ラサル事 第八条

校中定リタル場所ノ外猥リニ徘徊シ或ハ課業時間ノ外講堂ニ入リ或

第九条

ハ食事ノ外食堂ニ到ルヘカラサル事

第十条

私ニ小使ヲ使役スルヲ許サス若シ無拠事故アリテ書信ヲ発スル等ノ

第十一条

事アルトキハ是レヲ校内取締ニ可申出事

臨時ノ事故アリ会食ノ期ニ後ル、事アラハ速ニ其旨ヲ教員ニ可申出

事

第十二条

水曜日ハ校長及ヒ堂直教員各舎ヲ巡視ス各其預ル処ノ諸品書籍衣類

等ヲ列シ検査ヲ受ク可キ事

第十三条

第十四条

シ或ハ酒菓ノ類ヲ入レ或ハ他室ニ宿スル等ノ事アル可ラサル事 放課ノ時間ト雖トモ猥リニ他室ニ入ル可ラス又室中二人以上ヲ招会

浴湯へ取締ノ指揮ニ従ヒ順序ヲ混ス可ラサル事

第十五条

父母ノ看病等ハ親戚ヨリ医師ノ容体書ヲ以テ可願出父母遠国ニ在テ

病アリ帰省ヲ請者ハ其管轄府県ノ添状ヲ以テ可願出事

第十六条

リ願書差出ス可キ事

事故アリテ暫時退校ヲ願フ者ハ其父兄親戚又ハ引受人ヨリ日数ヲ限

暑中歳末放課中都テ帰省ヲ許ス若シ校中ニ留ルヲ請フ者ハ其意ニ任 第十七条

スヘキ事

第十八条

休暇ノ日外出スルトキハ教員ニ申シ鑑札ヲ請フヘシ若シ急病等相発

帰校ノ期ニ後ル、時ハ親戚或ハ引請人ヨリ医師ノ証書ヲ添ヘ届出ツ

第十九条

近火ノ節ハ教員ノ指揮ニ従ヒ都テ整列シ避退ノ用意ヲナシ教員ノ指

第九

第七 第六

揮ナクシテ擅ニ挙動スヘカラサル事

第二十条

官本ヲ拝借セント欲スル者ハ其書目ヲ記シ各其受持教員へ可申出且 三級生以下ハ課外ノ書籍拝借不相成事

第十三 第十二 第十一

退校 終リノ教戒 罰点ヲ記ス 校長ヨリ教戒ス 等級日記ニ記ス 教員ヨリ教戒ス 庭中ヲ洒掃ス 黌内ヲ洒掃ス

第二十一条

締ニ可申出事 筆墨紙等ハ月曜日朝飯後三十分時間ニ交付スヘシ各受取書ヲ以テ取

第二十二条

等ヲ記シ室外ニ出シ置へキ事

椅上ニ立タシム

室外ニ出ルヲ禁ス

第一

出門ヲ禁ス

課余習字

着椅ヲ禁ス

衣服洗滌ヲ要スルモノハ月曜日晩飯後袋ニ入レ其室ノ番号及其箇数

第四

第五

シ又課業ノ時限ニ後レ或ハ猥リニ教席ヲ去ル等ノモノアルトキハ之

ルトキハ之ヲ処スルニ出門ヲ禁シ或ハ黌内ヲ洒掃スル等ノ条ヲ以テ 右罰目ハ譬へハ門限ヲ誤リ障壁ニ戯書シ或ハ人ニ無礼スル等ノ者ア

ヲ処スルニ椅上ニ立タシメ或ハ等級日記ニ記スル等ノ条ヲ以テスル

ノ類其定例一ナラスト雖トモ凡規則ニ背ムク者ハ教員商議シテ之ヲ

処分シ且之ヲ校長ニ具申ス

午前六時開扉之事 午後五時鎖扉之事

校門規則

但潜り門ハ八時鎖扉之事 大門鎖扉之後長官次官通行之節ハ片扉ヲ開クヘキ事

八時後通行ヲ請モノ有レハ其姓名及用事柄聞糺シ候上通行可

差許事

生徒外出之節、鑑札受取置帰校之節可相渡鑑札所持無之者、外

出差許スヘカラサル事

但シ四月一日ヨリ九月三十日マテハ午後七時十月一日ヨリ三

年

月 日

月三十一日マテハ午後六時マテ帰校不致者ハ受取置候印鑑宿 直ノ教員へ可差出事

長官次官通行スヘキ人之外ハ其姓名及用事柄聞糺シ候上通行可

差許事

右之条々堅ク可相守事

今般入校被仰付候二付左之通御請仕候 生徒入校証書雛形男子

校中之御規則堅ク相守リ可申事

御法禁ヲ犯シ候歟又ハ校中御規則ニ背キ候条之儀ニテ退校被仰

付候節ハ入校中之学費毎月八円宛之割ヲ以テ速ニ上納可仕事 成業之後ハ北海道ニ編籍シ五ケ年御使ニ従事可仕尤他へ籍ヲ移

シ候儀願出申ス間敷事

在校又ハ従事期限中仮令大病等差起候トモ退去之儀願出申間敷 無拠事故有テ退校願出候節ハ校中一切之諸費総生徒之員数ニ割

合其一人分速ニ上納可仕事

右之条々聊違背仕間敷依テ証書如件

生徒 請人

誰

印

何 何

願人或親戚 何

印 印

官印

別紙証書之通相違無之候条入校御許容有之度候也

入校証書添書按

官名 某—殿 開拓次官—殿

即チ校長ナリ

府県知事令歟

姓名

開拓長官次官與殿

年

月日

生徒入校証書雛形

校中之御規則堅ク相守リ可申事

今般入校被仰付候:付左之通御請仕候

付候節ハ入校中之学費毎月八円ツ、之割ヲ以テ速ニ上納可仕事 成業之上ハ五年間御使ニ従事可仕且北海道在籍之人ニアラサレ 御法禁ヲ犯シ候歟又ハ校中御規則ニ背キ候等之儀ニテ退校被仰

事

在校又ハ従事期限中仮令大病等差起候トモ退去之儀願出申間敷

無拠事故有テ退校願出候節ハ校中一切之諸費惣生徒之員数ニ割

合其一人分速ニ上納可仕事

右之条々聊違背仕間敷依テ証書如件

生徒

何 誰 印

何 誰 印

請人

何 誰 印

願人或べ親戚

セニ

資生館生徒三名仮学校へ入校の件伺

大判官

七等出仕

上嶋

小野琢磨

十四歳ト五ヶ月

小林中主典@

兵頭虎雄 職 十五歳ト五ヶ月 十八歳ト八ヶ月

等之者ニ付御規則之通東京へ御差出相成度旨教官より別紙之通申立 今般資生館生徒学業致大試候処右之者共学業格別進歩人物も最モ優

之為メ屹度御用立可申殊ニ未タ弱冠未満之年輩ニも有之此上大府下 ニ五ヶ月之間ニシテ格別学業進脩之実効相立人物モ敏才往々ハ大使 候就而者致勘弁候処右三人之者共昨年十一月御開校已来昼夜勉励僅

般モ既ニ別格之御賞誉筋有之且学業未熟往々見込無之もの三名断然 へ差出シ鼓舞振作ヲ加ェ候得者益進脩大成可致見込之もの共ニ而今

退校被仰付候際ニ付右等抜群之もの共東京へ御差出相成候得者益勧 懲之典モ明ニ相立他之生徒も一際奮励成業之実効可相立奉存候間右

三名御規則之通東京仮学校へ御差出相成候様仕度此段奉伺候也

四月十八日

有之旁当秋試業迄見合可然事

書面之趣尤ニ相聞候得共東京仮学校色々御改正之際ニも

開拓次官黒田清隆殿

明治六年四月十二日

右則例之通違背不仕候依テ証印如件

右則例之通堅ク可相守事

官名

殿即チ校長ナリ

開拓次官 某

殿

明治六年四月十二日

開拓次官黒田清隆

学校中

事務

印 即 印

校長 教員

[農〇〇七]

札ノ四百三拾三号

付二

資生館生徒一名仮学校に入校許可の旨通知

但孰れニも次官殿御下向之上ニ猶此之書面丈可入尊覧

候事 @(松本)@(安田

[注] 別紙を略す。

付一 右の件に関し申入

 $\mathbb{H}$ 中 ・幹 事殿

松本大判官殿

札ノ第三百卅二号

安 西村正六位 田 定 則

時 任 為

基

士三 病室内則

六年十二月二十五日

(道〇五七五六)

第一条

病室内則

病室ハ常ニ空気ヲ通シ清潔ヲ勤ムヘキ事

第二条

常食ノ外別ニ患者へ滋養食ヲ与フル歟或ハ看病人等ノ増減アルトキ ハ事務掛へ可届出事

窮為致置樣有之度此段共申進候也

六年十月九日

歩之景況ニ仍リ夫々御通議及へく候得共先以当分之内へ其表ニテ研 条同館規則で前条之通改正相成候様有之度尤で右三名之者へ追々進 館ノ生徒ハ専門科ニ進級ノ者ナラテハ上京不申付事ニ決議相成居候 書類定則持参之上商議ヲ遂候処当春中仮学校諸規則更正之折札幌函 資生館生徒優等之者三名此表仮学校へ入学為致度段教官ヨリ伺出之

第三条

第四条

保養ノ為メ散歩スル者ハ予メ其時間ヲ節シ指許スヘキ事

患者ノ父母親戚等之ヲ訪フモノアレハ医員ノ許可ヲ経面会可致事 但飲食ノ物ヲ贈ルトキハ医員ノ点検ヲ受ク可キ事

松本大判官殿

田中正六位殿

二号ヲ以及御回答置候処即今当地仮学校生徒之内欠員有之候間兼 資生館生徒優等之者三名上京入学之儀御掛合ニ付十月九日付三百卅

安 西村正六位 田 定 則

御申立三名之内一名更ニ御撰挙之上出京御申付有之度此段申進候也 時任 為 基

而

第五条

・サル事	
右六ケ条堅相守ルヘキ事	患者医員ノ許可ヲ経ス猥リニ散歩致ス間敷事

患者薬食摂生法等一切医員ノ指令ニ背クヘカラ

〔農〇一五〕

十一番地之内六番麻布新網町壱丁目二 所 免 明治六年四月廿三日 職 薩児島県 生本 国貫 民士 族士 学 尸姓 校 FD (原学校) 氏

明治六年四月改正仮学校官員録[注]

任七

事等

明治七年二月八日

調

所 広

丈

名

年

齢

名

年

齢

卿

三四明 十六年

邦

十二四明 一十月治 ケ円 六 月年 年 年 年

幹

判

任

等

級

拝

命

掛

宿

奏

任

七四

仮学校官員録

第六条

八九十	八	七大八	等
	and a second	主	
等等等	等	等典等	級
同年九月二十日	明治五年八月廿	<b>七年五月八日</b> 明治五年九月	拝
Ē	日日	The state of the s	命
数	翻	事	掛
学	訳	務 掛	錘
一 赤松主船頭方 田錦町三丁目	次郎 地面内借 下 門 大区小三	第二大区	宿
カラ三之 番区 地神	地斎区小繁	TAMES TO THE STATE OF THE STATE	所
免二八 日年 出七	免十二 出五年 仕日十	函日七年五	免
任月 御十	一一一月	転用九	職
武海	武 静	薩 鹿 児	生本
蔵 県	蔵県	<b>摩</b> 県	国貫
族士	族 士	族 士	民士
朝藤臣原	臣朝源	臣朝平	尸姓
Щ	石	柳	氏
田	橋	田	
	好	友	. Az

			·		<del></del>	7	,
++++	+	九十	九十	大九十	九	九十	大権九御
一三四				主			主大用
等等等等	等	等等	等等	典等等	等	等等	典典等掛
同六年八月二日   同五年八月二日   日本七月二十五日   日本七月二十五日   日本日   日本日	明治六年四月	明治七年一月四日明治五年八月廿七日	同年九月九日 明治六年二月十日	同八年七月十二日 同六年八月二日 明治五年十月三日	明治六年四月廿日	同年九月二十日 明治五年六月十日	同六年八月十五日 同年四月十七日 同年四月十七日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日
FJ	<b>活兼和</b>	漢	英	事務	英	仏	校女
典	活兼和 版 漢 掛 学	学	学	掛	学	学	掛学
当校御構内		所寄留が出土三番地が一大区が一段では、一大区が八区市が	当校寄留	仮学校御構内	星野清重方 四番地 丁目二十	三丁目二十番地第二大区小九区三田	洲本港町二十三番地第一大区小七区鉄砲
免日 年 九 月 八	死十一月 十一月 十二月 十日	出 出 出 日 生 生 に 願 免			二 二 二 日 住 住 原 免 免 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月 月	省 十 五 日 柱 正 日 足 尾 軍 二	
周口防県	薩	武浜松県	出 島 根 雲 県	越 柏 崎 俣	上 群 馬 野 県	武長野蔵県	伊 〈美 <sup>宮</sup> 〈 本 〉
族士	族士	族 士	族 士	族士	民 平	族 士	族士
臣朝源	臣朝平	朝藤原		朝大臣江	朝藤臣原	朝藤臣原	臣朝源
野	伊地	保	井	森	藤	戸	福
邨	地 知	田	ЛІ		井	沢	住
致	季	久		源	assaudi assaudi	光	
知	方	成	洌	蔵	郎	徳	=
八二四明 ケ十月治 月六 六 年 年	十二四明 一十月治 ケ七 六 月年 年	四三四明 ケ十月治 月六 六 年	八二四明 ケ十月 六 月三 年	五三四明 ケ十月七 月七 年	八二四明 ケ十月治 月四 年	ケ二四明 月十月 六年 四	四三四明 ケ十月治 月四 年

十十任等	任十	任十等	+	少権十十	++	中権任十十	+
三四使一外	使五	史四外	=	主生三四	_=	主中少二三	
等等掌等	掌等	生等等	等	典典等等	等等	典典典等等	等
同八年七月十二日明治五年三月十五日明治五年三月十五日	同年八月二十五日明治五年八月廿四日	同年八月廿五日 同年六月十四日 明治五年四月十日	明治五年六月七日	六年八月十五日 同五年七月十八日 日十五五日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日	同五月二十二日 明治五年二月十四日	八年七月十二日 同年七月十二日 日十二日 日十二日 日十二日 日十二日 日十二日 日十二日 日十二日	治五年八月廿
写 習	医	事	医	校 女	育 土	校女	翻
字字	局	·務 掛	官	掛学	掛教	掛学	訳
住居 第二大区小十二区麻 第二大区小十二区麻	清水音吉方 網代町十二番地主 第二大区十五区麻布	番地住居 佐久間町二丁目十三 第二大区小二区芝南	二番地四ツ谷舟板横丁二十	内拝借 布笄町三番官園御構 第三大区小十五区麻	第二大区小四区 地毛利邸内 愛宕下町三丁目三番	邸中 野三大区小四区元飯第三大区小四区元飯	谷本村町父一所第三大区小九区市ケ
	北六 海年 道三 へ月	死十七 去八年 日四 月二	任司月十八日 明治八年七 年	先 七年十一月 一月	庶務へ」		免十六 出五年 仕日十二月
武静岡	薩 鹿児島	武 浜 松	武 北 条	武浜松	周山口	武 浜 松	武東京
蔵県	摩県	蔵県	蔵県	蔵県	防 県	蔵県	蔵府
族 士	族士	族 士	族士	族士	族 士	族士	族 士
臣朝源	宿 越	臣朝源	巨朝源	臣朝源	巨朝平	臣朝源	臣朝源
下	河	布	坂	花	入	加相	吹孝
Щ	野	ЛІ	本	和	沢	沢 <b>地</b> 晋	以 田長
依	道	信		年	義	昌郎	子鯛
徳	秀	義	知	邦	温	二位二二介	六
ケー日治	六二四明 ケ十月 月八 年 年	ケー日沿	五三四明 ケ十月治 月九 午	二五四明 ケ十月治 月一 午 年	三三四明 ケ十月治 月二 六年	四四四明 ケ十月治 月五 午	六二四明 ケ十月治 月二 六 年 年

十 御	任十 権	十	十十 御	十十等	+	任十	任任等
二用	中二主	_	一用	四五外	四	史五	史使一外
等 掛	典等	等	等等 掛	等等等	等	生等	生掌等
明治七年一月四日 月給二十円 五日	同八年七月十二日 明治六年十二月三日	明治六年十二月三日	明治七年一月四日 明治五年七月十七日	同八年七月十二日 同六年八月二日 日十二日	明治五年七月廿五日	七年八月十四日明治五年九月七日	七年八月十四日明治五年四月十日
医	事	司兼英	医	取 校	生	医	事七一七 日月年
官	務	典学	官	締 内	徒	局	務十十
山西栄蔵方 装伝馬町十三番地 第三大区小三区赤坂		番地碇屋鉄五郎方寓西ノ久保巴丁二十五	居住 久保葺手町八番地 第二大区四小区西ノ	芝切通元水野邸祭三大区九小区四ッ	当校御構内	地大久保従五位邸内松町三丁目二十八番第二大区小三区芝浜	地西ノ窪巴町三拾弐番
		出仕 照ニ依テ免 七年七月九	ı		世願日 八六年十一月 日	司法省へ転 七日 不年五月廿	任 手 県 三 月 転
薩 鹿児島県	鹿児島県	信 長 野 濃 県	肥 佐賀 県	武静岡陽県	長 山 口 門 県	伊 足 柄 豆 県	武静岡陽県
族 士	族 士	族 士	族 士	族 士	族 士	族士	族士
臣朝伴	臣朝平	臣朝源	臣朝源	朝藤臣原	巨朝源	臣朝源	宿 越 智
萩	柳	田	池	加	原	岡	越
原	田	中	田	藤	田	田	智
杏	友	元	玄	政	節	政	
蔵	英	郎	泰	敏	蔵	勝	朔
八二四明 ケ十月治 月七 六 年 年	一二十明 ケ十二治 月二月六 年 年	二十明十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二	六三四明 ケ十月治 月五 六 年	四二四明 ケ十月治 月六 六 年 年	ケ十四明 月九月治 年 七 七	五二四明 ケ十月治 月六年	六二四明 ヶ十月治 月五 六 年 年

御	御	等
用	用	
掛	掛	級
月給三十円明治五年七月十三	月給六十円明治五年七月十七	拝
	Ē	命
医 官	医官	掛
住久第 保二 等 手区	内不番市大	宿
町八番地居四小区西ノ	大村従四位邸	所
	一十月十	免
	被命」	職
肥 佐賀	三長崎	生本
前県	河県	国貫
族士	族士	民士
巨朝源	巨朝源	尸姓
一池上	尾	氏
=田書	本	
記玄 ス 一泰	涼海	名
一一一 六三四明 ケ十月治	四明 月浴	1
月五二六年	<b>デ</b>	齢

						,				
御	十	+		補		++	-	<del> -</del>	-	ŀ
用				十三	四	四五	-	-	3	<b>5.</b>
掛	等	等		等	等	等等	4	<b></b>	4	<b></b>
	八年七月十二日	八年六月三十日		同年七月十二日	治八年	同年七月十二日明治八年二月七日	治七年 区 月一 丑	月台二年四月十五日	1 2 3 1	月台二手至手卜允子
				獲	莫	校女	司弟	<b></b>	司第	<b>東漢</b>
				=	<b>Ż</b>	掛学	典	学	典	学
				同力居る	取方 丁三 十 四 大 区 三 小		村金吉方寄留工	<b>第二大区小一ノ区新</b> 第二大区小一ノ区新	家主	屈街三番也斤喬女돔第二大区八小区芝新
									移課へ転	年二月
	白	-	F	武	静		武	静	管	東
	川県		在 艮	蔵	岡県		蔵	岡県	下	京 府
		族 :	L L	族	士:		族	士	民	平
				朝臣	穂積		臣草	明源	朝臣	藤原
	平	田		金	슈	石	F	i i	1	<u> </u>
	野	中		7	k	渡	1	ì	J.	良
	候次	信		ŕ	Ţ	庄		E =	皀	定
	次郎	邦		_		=		<u>r</u>	3	<u>e</u>
							二サチー	九明 月 刊 治 七 年 一	ヶ二十年三	五明月 1 日本

同年	<b>等</b> 小	同	等 外 一	外	等 外 二	1	等 <b>丫</b>	等
等等	<b>宇</b>	等	等	i	等	4	<b>等</b>	級
同六年十月二日	台丘手や引	六年十月二	明治五年七月二日明治五年七月二日明治七年一月四日十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十		台 I. F	拝		
P	<u> </u> 		日	Н	<u>-</u> 目	F	4	命
掛女月教二	一二六二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二十二	掛女教師	月六 二年 日十	取締	校内	取締	校内	掛
真藏院方	二大	保神谷	第二大区	川	护大 J区	谷坂町坂	三大区	宿
三三番地	+	否	一六小区西ノ	È	十一小区四	下	九小区四ッ	所
同上			外事移					免
Lucian			転			MADDOON VAN BERTON		職
	東京	武	東京	武	東京	武	静岡	生本
	府	蔵	府	蔵	府 ———	蔵	県	国貫
族	土	族 ——	士.	族	土	族	士	民士
		臣韩	明源	巨草	明源	朝臣	藤原	尸姓
柳		柁	公	4	r r	上	П	氏
生		Z	K	В	E	一言語書	長	
恒		ï	f	Æ	斧	記述ス	女	
政		Ŋ	月	ā		每		名 ———
五四 十月 四	治	六三ヶ十月三	月治	十二 ケ 月五	四明 月治 六	四二ヶ月七	四明 月治 六	年
年	六 年	年	六年	年	六年	年	六 年	龄

御	御	御		
用	用	用		
掛	掛	掛		
月給百円明治八年七月十二日	月給二十五円 月給二十五円	月給二十円		
	医	医		
	官	官		
	元丁弐丁目二番地 第二大区小七区芝森	山西栄蔵方 表伝馬町十三番地 第三大区小三区赤坂		
	司 七 日 日 三 三 月 廿			
	武三潴	薩 毘 児 島 県		
	蔵県			
	族 士   切	族 士 臣朝伴		
Щ	H	上萩		
田	村	書原		
昌	俊	記 杏		
邦	斎	蔵		
	二三二明 ケ十月治 月六 年 年	八二四明 ケ十月治 月七 六 年 年		

四	四	四	四	四	等 外	等 外	等 外	等等 外外
等	等	等	等	等	等	三 等	等	二三 等等
					明治六年四月廿四日	明治六年四月二十一日	明治六年四月廿一日	明治七年一月四日明治五年六月九日
生徒	生徒	生徒	生徒	生徒	玄関	玄月六 関二年 詰日十	門候	取土締人
					内 だ五位大久保忠良邸 第二大区三小区浜松	居仕候 第二大区小四区芝愛	郎方ニ寄留 番地今入町西尾作二 第二大区小二ノ区五	晋三郎方 川佐賀町二丁目高田 京六大区小一ノ区深
		同上	同上	出 仕 被 免 」				
					武足柄	武長野	出島根	武浜松
				A CONTRACTOR OF THE CONTRACTOR	蔵県	蔵県	雲県	蔵県
					族 士	族士	族士	族士
						朝 藤 臣 原	臣朝源	臣朝源
渡	弥	長	野	松	高	Ш	渡	浮
辺	石	沢	津	ऋ	橋		辺	H
牧	柔	猪三	鎮	光	繁之助		徹	邦
太	嘉	郎	武	霽	莇	満	雄	高
					七四四明 ケ十月治 月九 六 年	六三四明 ケ十月治 月五 年	九三四明 ケ十月治 月一 午	二三四明 ケ十月治 月二 年

御	御	等
雇	雇	級
月 月 月 月 日 月 日 日 日 二 十 月 二 十 月 二 日 二 日 二 月 二 月 二 月 二 日 二 日 二 日 二 日 日 二 日 日 日 日	月給二十五円 月給二十月二日 月給二十月二日	拝
	Ħ	命
女同教和 学 漢 校 員学	女但教和 学 漢 校 員学	掛
居恩北第 等清島大 中市 龍	助正下第二 方原 居	宿
加 力 五 五 五 五 世 表 世 表 世 表 章 章 是 章	荒壱四 井都地愛 之林宕	所
日七被年	七七 日年 被十	免
免十 月 世	免月	職
 摂 大 坂	武東京	生本
津府	蔵 府	国貫
族 士	族士	民士
臣朝源		尸姓
正田周吉母如母	( ( ( ( ( ( ( ( ( ( ( ( ( (	氏
英	介鳳	名
六六四明 六十月 ケ十月 月五 年 年	ケス アカリカ アカリカ アカリカ アカリカ アカリカ ア ア ア ア ア ア ア	年齢

御雇

	A CONTRACT TAXABLE PARTY AND A CONTRACT AND A CONTR		1					
	谷 蔵 県 族 士	武熊		地曾我助尚方市兵衛町壱丁目二番第二大区六小区麻布	門候	明治六年十月二日	等	
	期 前 県 佐 士 臣朝源	羽置		寓 第二大区小二区今入	門候	明治六年十月二日	等	
臣原	京府	武東京	五日被免」	八番地 川三ッ筋町二丁目十 第三大区小拾壱区青	掛女教師	明治五年七月廿五日	等	
	蔵 県 族 士 臣朝源	武静	五日被免」	木次郎地面之内 久保巴町十三番地鈴 第二大区小四区西ノ	掛女教師	明治五年七月二十五日	等	=

官費	私官費
六	舎
舎	号
宿所在県	宿
	所
一四明 日月治	入拝
二六十年	校命
	退
	校
武長	生本
蔵 県	国貫
番第 長地二 野	父
1地真田幸民27二大区小四5人野県貫属士4	兄
(野)	引
高平 留町智 二	受
前士族田	氏
持	
明	名
一十四明 ケ九月治 月年 六	年
月年 六十 年	齢

明治六年四月改正仮学校生徒表 七五 仮学校生徒表

	,	,		
	御	御	御	御
连	雇	雇	雇	雇
表中朱筆によるものは	月給十五円 日	月給八円明治七年八月十二日	明治六年二月十八日 明治六年二月十八日	明治五年八月五日 明治五年八月二日 日本十一月二日 日本十一月二日 日本
「」で示した。	医官	取員裁 兼縫 締 教	教士育人	
かした。		今井鉉四郎同居 本町十八番地住平民 第二大区小五区芝宮	田龍閑町十九番地第一大区小十二区神	
		七年十月三	七年十月廿	免二七年八 日 依 願 被 被
		武 東 京 蔵 府	武 東 京	摄
			民平	族士
[農〇二	内村昌伯	今 井 美 津	水野 小紅	上田田 金之 卯助母 女
[農〇二〇一二]		十三八明 一十月治 ケ九 月年 年	八二四明 ケ十月治 月一 年 年 年	二三四明 ケ十月治 月二 年 年

同	同	同	同	同	同	同
Ŧī.		壱	<u>+</u>	拾	八	九
舎	舎	舎	五舎	舎	舎	舎
深宿所 経 岩 方	宿所在県	橋畳町十番地所	同	宿所在県	同	同
一四明 日月治 二二六 十年	一四明 日月六十二十年	一四明 日月治 十年	一四明 日月治 二六 十年	一四明 日月治 二十年	一四明 日月治六十年	一四明 日月治 十年
伊 木 更 津 見	長 山 口 門 県	青森県	信長野県	長山口県	信長野県	岩青森代県
真方寄留 第五大区小二ノ区十五番 地所向柳原一丁目堀江弘 地所高级第二丁目堀江弘	保広町望月方 第二大区小十四区西ノ久 第二大区小十四区西ノ久 東京 保広町望月方	治番地所 第一大区七小区京橋畳町 松 邨 幸 孝	丁目二十一番地河原驥方第一大区十小区木外区十小区木挽丁一客一下 知 幹	宿所在県 清 鞆	三十二番地松平忠礼邸内第三大区三小区表六番町恒川 重遠	三町目榎本武揚邸内第四大区小二区今川小路 框 本 武 与静岡県貫属士族
深士族谷	飯士 族 田	₹長久士 族 ≷沢水	西士族	島士族田	西士 族 山	山士 族 際
千	篤	<b></b>		純	正	永
尋	信	郎	哲		吾	吾
一十四明 ヶ五月治 月年 六 十	ケ十四明 月五月治 年 六 年	ケ十四明 月七月治 年 七	ケ十四明 月六月 六 年 九	ケナ四男治 月九月 六年 七	ケ十四明 月八月治 年 七 年	一十四明 ケ八月年 月年 十
-	근					

同	同	司	同	同	同	同
七	八	<u>±</u>	九	弐	七	四四
舎	舎	十三舎	舎	舎	舎	舎
永田町壱丁目第三大区二小区山王	宿所在県	宿所在県	肥後盛之方	地所父山本晴治方 横網町二丁目拾六番 第六大区六小区本所	宿所在県	荒川重平方 鳥森町武田屋舗ニテ 原ではいニノ区芝
一四明 日月治 二六 十年	一四明 日月治 二六 十年	一四明 日月治 二六 十年	一四明 日月治 二六 十年	一四明 日月治 二六 十年	一四明 日月治 二六 十年	一四明 日月治 二六 十年
					,	
薩 鹿児島県	伊 三 重 勢 県	長 山 口 門 県	武東京京	武小田蔵県	但 飾 馬 県	武 東 京 蔵 府
町 第三大区小二区山王永田第三大区小二区山王永田鹿児島県士族	北海道〈御用中 佐藤 秀 顕 三重県貫属開拓使出仕	寿邸内 二丁目六十九番地秋元正 二丁目六十九番地秋元正 中 木 之 植	を で で で で で で で で で で で で で	治方 一次 一次 一次 一次 一次 一次 一次 一次 一次 一次	一丁目三番地 第一大区十三小区浜松町 田 辺 央 立	三丁目廿一番地 第六大区小七区本所緑町 第二十四番地 東京府貫属
山士 族 本	長士 族 尾	安士 族 田	伊平 民 藤	山士 族 本	田士族路	荒士 族 川
盛	景	長	_	晴	基	重
実	孝	秋	隆	久	胤	秀
ケ十四明 月四月治 年 六 四 年	ケ十四 月五月 年 六 年 六	ケ十四明 月六月 年 五 年	ケ十四明 月四月 年 一	ケ十四明 月三月治 年 三	ケ十四明 月六月 六 年六 年六	ケ十四明 月四月治 年 一 年
Ŧ	Ī	五.	四	Ī	九	

***************************************						
拾 六 舎	拾三舎	拾九舎	拾二舎	拾七舎	拾一舎	十一舎
谷箪笥町四十番地所第三大区九小区四ッ	一番地四ッ谷左門町第三大区十小区八十	正芳方 番地飯倉狸穴父大島 第二大区小七区十六	茅町二丁目拾三番地第四大区小六区下谷	宿所在県	第八大区小一区千田 ケ谷仲町壱丁目六十 大田	宿所在県
一四明 日月治 二十年	一四明 日月治 二二年	一四明 日月治 二六 十年	一四明 日月治 二六 十年	一四明 日月治 二十年	日四明 月治 十二年	一四明 日月治 二十年
		事校月九年十二 候退二				
武東京麻府	武 東 京 蔚	武浜松県	平神奈川県民	信長野濃県	武 滋 賀 蔵 県	酸 < 木 <sup>千</sup> 葉 × 更 ※ 津 河 県
宮町百三十八番地第六大区八小区北本所若第一石 永清	横浜太田上新田寄留 野嶋 昌 艾	地飯倉狸穴 地飯倉狸穴 大島 正 芳 島 正 芳	目四番地借 第一大区五小区本町壱丁 第一大区五小区本町壱丁 中左衛門	所構內 大区警視出張 板本町第一大区拾五小区八丁堀 植 宗 義	中 田 要三郎	・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・
高士族野	河士 海 族 村	大島	横平 民 山	堀士 族 田	藤士 族 田	浜士 族 島
寛 林	冒富	正繁	彦 四 郎	連太郎	誠一郎	暢美
ケ十四明 月三月治 年 十	一 一十四明 ヶ一月治 月年 六 十 年	ケート サード サード サード サード サード サード サード カード カード カード カード カード カード カード カード カード カ	ケ十四明 月六月 六 年 一 年	一十四明 ケ五月治 月年 六 十	ケ十四明 月五月治 年 四	ナロリカップ サロリカ
二 十 五	一十九	= +	士	乙		六

			***************************************			
					The Control of the Co	A Committee of the Comm
十八舎	六	拾 舎	拾六舎	拾七舎	拾 八 舎	拾二舎
久直方 等中願寿寺同寓川村 南稲荷町拾番地唯念 南延大区六小区下谷	宿所在県	町三番地第一大区小九区丸屋	屋崎開拓使貸附所御長第一大区十六小区函	父山村林慶方	加藤信順方 相間重正邸内借宅父 地三筋町四十三番地 地三路町四十三番地	宿所在県
一四明 日月治 二六 十年	日四明 月治 廿六 一年	一四月 日月二十 十年	一四月 日月二十 十年	一四明 日月二十 十年	一四明 日月治 二十年	一四明 日月二六 十年
						旨へ静十 届転岡年 出籍県六 之下月
武	薩 鹿児島県	武管東 下京 蔵民府	武 静 岡 蔵 県	武 京 蔵 府	武平東 民 京 蔵 府	駿≷木¾ ★更 ※津 河 県
番地小川屋藤七方寓第一大区小十六区霊岸島第一大区小十六区霊岸島中大区霊岸島村、   東	二丁目第三大区二小区麴町永町第三大区二小区麴町永町 本 吉 蔵	番地 木更津県平民 麻 薙 典 則	百十三番地 第十大区老小区金杉村二第十大区老小区金杉村二 章 華岡県土族	目八番地 第三大区小二区麹町六丁 第三大区小二区麹町六丁 東京府士族	借	地
島川静岡津久直族 勇厄族	上士族。	内平 展 藤 吉	高士族林	山平 邨 俊	加平 民 藤 国	小士族野
介 治 —————	孝	金	太郎	英	彦	基
ケ十四明 月三月治 年 三 年	ケ十四明 月五月治 年 三	ケ十四明 月四月治 年 二	ケ十四明 月三月治 年 六	ケ十四明 月一月 年 三	ケ十四明 月一月治 年 五	ケ十四明 月四月治 年 四
= + =	十四四	一一八	#	三十六	= +	1

十 五.	弐	壱		四	五.	十九九
舎	舎	舎	舎	舎	舎	舎
光方一所 第二大区小九区三田 第二大区小九区三田	路邸内栗原克忠方第二大区小二区田村	時任為基方	父川邨久直方	宿所在県	宿所在県	川箪笥町五十三番地第九大区小二区小石
一四明 日月治 二六 十年	一四明 日月治六 十年	一四明 日月治六 十年	一四明 日月治 二六 十年	日四明 月治六 一年	一四明 日月治 二六 十年	五明 月九六日
武 長野	武管開	薩 鹿 児	武静岡	薩児島県	出酒田	武東
蔵県	下 平 石 蔵民使	薩 鹿児島県	蔵県	摩 県	羽県	京蔵府
四十三番地大給恒邸内第二大区小八区芝松本町十三番地大給恒邸内	四丁目九番地 第二大区小三区芝浜松町 第二大区小三区芝浜松町 華 雄山口県土族	光町九番地第七大区小壱区白銀下三第七大区小壱区白銀下三年 任 為 基鹿児島県	等方 一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一	関八番地 東児島県 市 オ 友 実 東 大区小一ノ区裏霞ケ	所湯嶋妻恋坂下三組町 朝比奈 泰 吉 雷田県土族	第六大区小二人区小石川 第九大区小二人区小石川 安 西 正 直 正 直
戸士 族 沢	田平民中	時士 族 任	川士 族 村	野士族津	松士 族 平	島士 族 田
		静		鎮	光	直
鼎	薫		久	武	霽	厚
ケ十四明 月一月治 年 五 年	ケ十四明 月五月六年 三	ケ十四明 月二月 六 年 九	ケ十四明 月四月治 年 三	ケ十四明 月五月治 年 五 年 五	十四明 二月 年 年 年	ケ十五明 月五月 十五月 十五 年 五 年 五
丛	二十七」	三 十 四 二	十六	十五二	=	十 九

,		· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·			I		1	
							十九舎	十 五 舎
							二丁目八番地下谷中徒士町第五大区小四区二十	居二十一番地住第二大区小九区三田
							五明 月治 五六 日年	一四明 日月治 二六 十年
				薩 鹿 児 <sub>マ</sub> 摩 県ご	薩 鹿 児⊋ 摩 県ご		平 京 京 民 府	武東京府
							町二丁目十四番地寄留第六大区小六区本所松坂 田 盛 庸	目松平信英方 第二大区小九区三田三丁 中 中 中
兵頭	志水	宗士 族 像	服部	大士 族 山	得士 族 能	小島	松平 民 平	松士 族 平
虎雄	小一郎	政	敬二郎	助 市	新 次 郎	倉太郎	銀二郎	信英
		二二三明 ケ十月治 月一 八 年 年		ケ十三明 月六月八年 八年 八年	ケ十三明 月三月沿 年 八 年	十四月 年 年	ケ十五明 月二月 年五 年五	ケ十四明 月四月治 年 五 年

日月十十年		日九明治五十五年	 六九明 日月治 二二五 十年	一 八 月 二 日 日 年	九七明 日月治 二十年 十年	 九明 月五 日年
	七日退校」					
士 浜 松 県	武豊岡蔵県	美岐阜県	信長野農	長 口 門 県	越新潟県	志士度 族会 摩 県
		九段坂上富士見丁	村山 太郎 世界	鹿児島県士族 春 堯	浜松県土族	芝新銭座 藤 真 琴
高士族橋	斎士 族 藤	坂士族	三士族沢	賀士 族 田	桑士族田	稲士族垣
裏	治	市太郎	裏	貞 二 ———	明	徹 之進 ———————————————————————————————————

北海道地質測量生徒

小	佐
野	藤
琢	
磨	勇

「本多銀太郎 高木平民三郎

					同	電信
入月六 校十年 日十	日月六 入十年 校一十	日月六 入十年 校一十	日月六 入十年 校一十	入十年明 校一十治 日月六	入十年明 校一十治 日月六	十年明 四九治 日月五
	,				地地亀島丁四十五番第一大区十五小区八	電信頭方 愛宕下十四番地石丸 第二大区小
四六拝 日年命 十 月	十明拝 月治命 四六 日年	十明拝 月治命 四六 日年	十明拝 月治命 四六 日年	十明拝月治命四六日年	十明 月治六 日	六九明 日月治 二五 十年
武 長 野 蔵 県	武静岡岡東	会 青 森 津 県	佐 佐 賀 賀 県	越 新 潟 後 県	武 東 京 蔵 府	肥 白 川 後 県
芝増上寺山内如蘭社寄留 鎮 目 弘 毅長野県士族	駿河台鈴木丁十六番地 酒 井 張 甫静岡県士族	大丞邸内 田昌邦 出使八等出仕	麻布一本松町十四番 田 代 苗 臣	表茅場町三丁目 柳 谷 藤 吉	弥石方 丁目四十五番地第二大四十五小区八丁堀第一大区十五小区八丁堀年五府区八丁堀東京府士族	川従四位邸内 田 正 勝白川県士族
鎮 目 敬 忠	大 川 長 吉 市 大 川 長 吉	日 向 真寿見	西 種 彦	村井一郎	弥 石 柔 嘉 系 嘉	赤星鼎
十十明 六月治 年 年	ケ十十明 月四月六年 二二	ケ十十明 月九月治 年 四 年	ケ十十明 月七月六年 四 年	二十明十月治六年年	ケ十十明 月六月治 年 五 年	ケ十四明 月八月治 年 四

N/44/			同	同	同	入十一六 校七月年 日二十	校七一六 日月年 入廿十
							宿所在県
	一明 月治七年		 拝 命	拝 命		日十明拝 月治命 廿六 一年	廿六拝 一年命 日十 月
	士 開 拓 族 使	士 開 拓 族 使	平管開 拓 民下使	平管開 拓 民下使	平管開 拓 民下使	渡僧管開 拓 島侶下使	渡平開 拓 島民使
	目三番地 第五大区七小区下谷二丁 第五大区七小区下谷二丁 東京府士族	町三番地松前従五位邸内第五大区小二区浅草小岛第五大区小二区浅草小岛阴拓使土族	町三丁目一番地 第六大区六小区本所相生 第二大区六小区本所相生 東京府平民	十二番地伊東盛貞方 村 山 折 三 開拓使平民	町二番地 第六大区一小区深川相川 東京府平民 助 弥 助	町三十三番地 東京府士族 東京府士族	町三丁目壱番地 東京府平民 物兵衛
河土族村	井士 族 野	村士族山	小平 民 林	遊平 民 佐	山平 民 田	堀僧 侶 川	丸平 民 山
忠三郎	熊	徹	徳 太郎	泰 三 郎	和 作	義治	功
	ケ十一明 月六年 年八 年八	ケ十十明 月六二治 年月六 一	ケ十十明 月三十月 年月 年 春	一十十明 ケ三一治 月年月六 十	ケ十十明 月四一治 年月六 十	ケ十十明 月四一治 年月六 十	一十十明 ヶ四一治 月年月六 十

			引請人一所	引請人一処		引請人同処	
—————————————————————————————————————	同上	三明拝 月治七 日年	十十明拝二二治命日月六二年	十十明拝 二二治命 日月六 二年	二十明拝日二治命月六十年	二十明拝日二治命月六十年	
			進士東 京 島族府	 武平東 京 蔵民府	   越士新   潟   後族県	武平静 岡 蔵民県	
開拓使掌 辺良作	開拓使出仕 鬼 光 忠	白石村 藤 利 道	一邸内 不明 不		宿所当校 源 三	三田一丁目阿部邸内 宮田 正之 正田一丁目阿部邸県平民	
渡 辺 安 吉	底 一 庭 山 恭次郎 赤島光忠厄介	加藤光 弘	栗 原 克 行	河 辺 雄次郎	伊藤 廉 蔵	宮平田田温温	小 杉 侃之丞
ケ十三明 月三月治 年 三 年	ケ十三明 月四月七 年	ケ十三明 月三月治 年 三 年 三	ケ十十明 月五二治 年月六 一	ケ十十明 月六二治 年月六 十	ケ十十明 月七二治 年月七 七	ケ十十明 月六二治 年月六 七	

Management							-	
四月光七年	二月 月 月 七 年	八三明 月月七 年十年	同上	同 上	同上	- 同 上	拝三明 命月治 十七 日年	同 上
	月 死去 一		御免」	同同	御免」		御免」	御免」
	士開 拓 族使	平宮 城 民県						
	等了七十七番地 第六大区小八区南本所外第六大区小八区南本所外 第二 井 和 強	短城県下平民	安瀬 平三郎 安瀬 平三郎	所据使管下 所据使管下	平民 高 橋 長 敬明拓使管下	平民 高 橋 啓 庵	平岸村 坂 本 平九郎	平民 工
東海林嘉平	小 杉 格之丞	樋 口 財 一	安 瀬 清 蔵平三郎弟平民	斎藤 吉右衛門 民 惣右衛門三男平	高 橋 勝 蔵長敬二男平民	高 橋 十三郎	坂本平九郎長男	前 田 富太郎 田三郎三男平
	ケ十二明 月八月治 年 五 年	三二三明 ケ十月治 月一 七 年 年	十十明 五一円治 年月七年	十十明一十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十	ケ十十明 月三一治 年月七 二	ケ十二明 月三月 七 年 二	月十十明 歳一治 九月七 ケ	十十明十一十十一十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十十

	四明 月治七年
	生徒御免」
-	雑
	賀
	孫
	八
	ケ十十明 月一一治 年月七

즲 表中朱筆によるものは「 」で示した。

七六

新選生徒試験入校期間に付伺

次官

五等出仕

七七 留学生処分に付伺

[農〇二〇一二]

第三十八号

正院御中

開拓次官黒田清隆

ラ農工諸術研究之為差遣置候者ニテ他之生徒ト自ラ相異ナルヲ以従 先般外国留学生之儀文部省見込書相添御下議二付本使生徒之儀、專

生徒之分者勿論從前之通相心得可申尤前書申上候通生徒之中後来成 省幷大蔵司法工部三省へ御達相成本使へ者別段御沙汰無之ニ付本使 前之通本使ニ於テ管轄致度旨申上置候然処今般留学生処分之儀文部 留公使へ掛合之上夫々処分仕度此段奉伺候也 業之目的無之者又ハ擅ニ転科易地等之儀ハ本使限リ規則相定各所在

之上退校申付度左候テ右日限中之諸入費者差出候ニ不及候樣御治定 置六十日間ハ試検中ト極置若将来学業其他進歩之目途無之者ハ吟味 処通学ニテハ性行其他モ相分兼可申候間惣テ外生徒同様ニ入校為致 自今新撰之生徒入校ニ付別紙之通り助教ヨリ申出候間篤ト勘考仕候[注]

相成度奉伺候也

但北海道ヨリ出京入校之者モ同様ニ致度候也

調所広丈印

明治六年五月廿九日」

〔道○五七四一〕

函館の露学生徒用書籍注文方依頼

伺之通

五月三日

但試験中日限之義者三十日迄ト可相心事

锤 別紙を欠く。

[農〇一八]

第弐百三十四号

印(黒田)

七八

西
邨
正
六
位
殿

為基殿

魯学教師サルトフ氏御雇入ニ相成当地ニ於テ魯学校相開候ニ付テハ

之而者差支有之候趣ニて同氏ヨリ別紙之通申立候右者東京横浜等ニ 此頃中魯学生徒追々相増殊ニ初学ノ者多分ニ有之候間初学之書籍無

申遣シ至急ニ取寄候様可然御取計有之度此段及御依頼候也 来舶致し居候哉難計候間篤ト其筋御取調万一無之候ハ、魯国江注文

明治六年七月三十一日

別紙之通ニ有之候為御心得此段も申進候也

猶以書籍代価凡見込及魯国ヘートルブルグヨリ本朝迄運賃見込共

書籍代価

天地球儀

揃

代廿五ルーブレイ

代廿五ルーブレイ

万国地図

惣代廿五ルーブレイ

レイフ氏著述魯仏独英対訳字典

五拾部

惣代十二ルーブレイ五十カペイク 五部

杉浦中判官⑩

幼年会話書

廿五部

惣代廿ルーブレイ

イワノフ氏著述文法書

五十部

惣代七十五ルーブレイ

歴史大略 (1987年) 惣代十五ルーブレイ

廿五部

但シーヶ年分

童蒙日誌

惣代十五ルーブレイ

初学篇

百部

三拾部

習字書

惣代十五ルーブレイ

惣代三ルーブレイ

魯都ペトルブールグヨリ皇国マデ運送代価三十ルーブレイ

惣合計二百八拾五ルーブレイ五拾カペイク

但シードルラルニ付一ルーブレイ三拾四カペイク量目ニシテ惣計

弐百拾三ドルラル拾セント也

右之通リニ候也

選 八四大 写為に

廿部

スミルノフ氏著述小地理書

惣代廿ルーブレイ

サルトフ

訳三埜又一

付 露学生徒用書籍送付に付問合

函第五百三十四号

杉浦中判官殿

西村少判官印

幹事⑪

調所

昨六年七月三十一日付第二百三十四号ヲ以御申越故魯学教師サルト フ氏申立候魯学生徒用書籍類巴里府へ注文致置候処今般到達ニ付其

初学用ノ書籍ニ付御都合次第御送致可取計別に御回答有之度此段御 手順ニ至候上ハ遠隔ノ場所運輸ノ手数相掛ケ候モ無益ノ事ト存候併 儘御送致可取計筈然ニ右サルトフ物故後上等生徒三名ノ者出京等ノ

掛合及候也 七年七月

[道〇五七九八]

七九 雇教師フーク満期解約に付感謝状等進呈の件

気一匹聊微志ヲ表シ候間御落手有之度候右解約之次第幷是迄之厚意 方格別勉励懇切ニ御世話被下生徒進歩之益不少満足ニ存候仍テ島海 六箇月満期相成候ニ付最前之条約ニ従ヒ致解約候雇中学校生徒教導 筆致啓上候陳者貴下雇期限明治六年二月 ポナラ年二月 ヨリ本月迄

> ヲ謝センカ為如此御座候以上 明治六年七月

開拓使七等出仕調所広丈

開 拓 次官 黒 田 清

〔道〇五七四二〕

フロス、フーク貴下

八月十五日

Л О ランドルフ職掌等に対する異議に関し処置の件(注)

置ノ件 御雇米人ラントルフ条約幷学科等ノ儀ニ付異論ヲ生シタルニヨリ処

号

条約書

千八百七十二年第十二月十二日

華盛頓スミソニアン学校ノ博士へンリーノ勧ニ依テ東京或ハ蝦夷 書ヲ以テ証ス同人ハ通辨官ヲ備レハ英語ヲ以テ教授スヘシ同人給 シー州ジエルシー府ノジョン、シ、ランドルフヲ雇入ル、旨ヲ余此 島ノ内追テ開拓使ノ定ル所ニ在テ器械学ノ教師タル為メニウセル 料ハ亜金五千弗ニシテ紐約ヨリ日本へ向ケ出発ノ日ヨ 一於テ紐約ヨリ東京迄ノ旅費ト公用ニ依テノ旅費幷ニ東京ヨリ紐 リ始ル同使

二号

条約草稿

約迄帰程ノ旅費トハ之レヲ払フベン

ランドルフ氏雇期限ハ紐約出立ノ日ヨリ三ケ年トス但シ双方六ケ

添へ日本滯留中住ノタメ家屋一箇ヲ備フベシ給料ノ内トシテーケ 月前ニ其意ヲ演述シ期限中破談スルヲ得ヘシ同人ニ一名ノ助役ヲ

東京迄ノ旅費トシテ正金四百五拾弗余ヨリ之ヲ渡シタリ

月分給料正金四百十六弗六拾八銭余ヨリ之ヲ渡シタリ又紐約ヨリ

ランドル氏ハ今日ヨリ六周間ニ出帆スヘシ 委細ノ約束ハ日本到着ノ日開拓使ノ長ト議定スヘン

在亜米利加合衆国日本皇帝陛下ノ代理公使

有

森

礼

米利加合衆国ノ公民「ジョン、ランドルフ」君ト取結ヘル条約左 明治六年 月 日日本政府ニ代リ開拓七等出仕調所広丈君ト亜

ランドルフ」氏ハ左ノ条々ヲ行フ可キヲ同意シ之レヲ約諾ス

如シ

明治六年一月三十日即チ西洋一千八百七十三年一月三十日ヨリ三 ケ年即チ三十六ケ月器械学幷ニ開拓使ノ求メニ応シ其他学術ノ教

師トシテ開拓使ニ奉職シ皇国日本中命セラレ或ハ請ハル、場所ニ

拓使ノ官員及ヒ教師頭取「ゼネラル、 在テ其諸業ニ従事勉強シ其職ヲ尽シ期限中不絶日本政府ニ仕 ホーレシ、ケプロン」ヨリ に開

達スル諸命令ヲ遵奉致ス可キ事

約定期限中ハ公然或ハ隠然一切商売筋ニ関係致間敷事

第三条

得スシテ其職務ヲ廃シ申間敷事

日曜日及と追テ日本官員ヨリ達ル別段休日ノ外へ官員ヨリ許可ヲ

調所氏ハ左ノ条々ヲ同意約諾

前文ニ掲示セル「ランドルフ」氏職務ノ為メーケ年給料亜金五千 第一条

弗ト定メ月割ヲ以テ毎月廿五日ニ相渡候事

但シ日本金貨或ハ紙幣ヲ渡ストキハ亜金ヲ元ニ立テ相渡候事

本金貨四百五拾円可相渡若シ北海道滞在中満期相成候節へ其場所 満期雇ヲ止ル節ハ東京ヨリ亜米利加合衆国へ帰程ノ旅費トシテ日

ョリ東京或ハ横浜迄ノ旅費別段可相渡事

帰路旅費四百五拾円相渡シ可申「ランドルフ」氏ヨリ廃約ノ節 但シ双方トモ六ケ月前ニ其意ヲ報スル時ハ期限中此約書ヲ廃止 スルヲ得ヘシ若シ調所氏ヨリ如此シテ満期前約書ヲ廃止候節

ハ相渡候事

第三条

此約定期限中ハ「ランドルフ」氏ノ為メ住家一箇ヲ備へ破損ノ節

ハ其修理ヲ加フヘシ然レトモ其家具自用品等ハ「ランドルフ」氏

自費ヲ以テ可相辨事

第四条

其要用ナル旅費ハ相払可申事 ランドルフ」氏開拓使官員ノ命ニ依リ一処ヨリ他所へ旅行ノ節ハ

若シ「ランドルフ」氏連綿九十日間此約書ニ載タル職務ヲ行フ能

ハサル節ハ此約書ヲ廃シ約書廃止ノ日迄ノ給料而已相渡可申但シ

合衆国へ帰程ノ旅費相渡幷ニ要用ノ手当可致事

若シ又「ランドルフ」氏万一死去致候節ハ同人後嗣或ハ引請人へ

又「ランドルフ」氏其職務ヲ怠ル歟或ハ開拓使ノ官員ヨリ達スル 埋葬料トシテ四百五拾円相渡可申事

書付ノ命令ヲ違背スル歟又ハ政府ニ不満足ノ事ヲ引起ストキハ直 ニ其職ヲ免シ免職ノ日迄ノ給料而已相渡帰程ノ旅費ハ不相渡候事

右ノ条々之ヲ証スル為双方此書ニ手記調印セリ

三号

ラントルフョリケフロンヘノ書翰

千八百七十三年第五月廿二日開拓使

セネラル、ケフロン君

検査ノ為メ御遣シ相成候約書ノ義ニ付謹テ左件ヲ申上度候 私儀ハ既ニ千八百七十二年第十二月十二日華盛頓ニ於テ開拓

二 私義、右千八百七十二年第十二月十二日閣龍比亜州華盛頓ニ 使ノ代人タル森氏ヲ以テ同使ト取結候約書所持罷在候

於テ取結候約書ヲ以テ全ク満足罷在候

益有之間敷存候○御遣シノ約書ハ此等并ニ其他ノ訳ヲ以テ尽ク 非難スヘキ且ツ不定ナル約書ト交換致候ニ於テ少シモ私方ニ利 私於テハ開拓使トノ確定且ツ満足ナル約書ヲ調所広丈君トノ

不満足ニ有之候

前段情実開拓使殊ニ調所広丈君へ御申通被下候様相願候謹言 ジョン、シー、ラントルフ

千八百七十三年第五月廿二日

**謹テ調所広丈君ニ呈ス** 

開拓使教師兼顧問 ホーレシ、ケフロン

四号

ラントルフ建言

ホリテクニツキ学校御取建ノ事

回方今開成学校高級ノ者右学校ニ相応可仕事 の右学校へ開拓使ヨリ文部省管下ニ置候方可然事

⑤右学校ハ「アンチセル」幷ニ「ラントルフ」へ御委任ノ事 邸右両人ハ小期限ノ約定トナシ置双方協議ノ上再約定取結可申事 ◎文部省ト約束ヲ立テ毎年及第生幾許人ヲ開拓使ニ附与可致事

◎右両人教官ヲ人撰シ政府ニ代テ約書ヲ結ヒ彼等ヲ指図シ学校ノ 但シ約定期限中へ学校ヲ総括シ他ョリ立碍リ申間敷事

①学校事務裁断向両人同意ノ事ハ之ヲ施行スルノ全権可有之事若 為ト思フ時ハ其職ヲ免スヘキ事

シ不同意ノ義ハ日本諸省ヨリ派出スル議官ノ決断ニ任スヘキ事

()右両人此学校八ヶ年ノ末ニハ成就シ八ヶ年目ョリ毎年若キ「イ第一右両人此学校八ヶ年ノ末ニハ成就シ八ヶ年目ョリ毎年若キ「イ (1)開拓使ニオヰテ此等ノ手段ヲ施ストキハ道路ヲ開キ運河ヲ掘リ ンセニール」等ヲ仕立差出スヘキヲ同意ス

臼以テ溶炉ヲ築造シ鉱属ヲ溶解シ金類ヲ造ルヲ得ヘシ (バ以テ鉱山ヲ開採スルヲ得ヘシ 其他蝦夷島須要ノ工業ヲ為ス少年幾何ヲ得ベシ

( 蝦夷島ニ於テ器械ヲ製造スルヲ得ヘシ **景鉄場及ヒ板金ヲ造ル車ヲ取建ルヲ得ヘシ** 

· 的漁業増加シ油ヲ搾リ各国ニ輸出スルヲ得ヘシ

的此等生産ノ諸業以テ日本及ヒ亜国ヨリ移民ヲ招キ寄スルニ至

^ >

附言

ケプロン、アンチセル、ランドルフ」トモ何時ヲ論セス会議ノ席 ニ「ランドルフ」ニ下問ノ事アラハ楽ンテ之ヲ答ヘシ「ゼネラル 開拓使ニ建言スル此等ノ目的ヲ施シ行フニ於テ「アンチセル」幷 ランドルフ

五号

ニ同人等ノ論説ヲ呈スヘシ 生徒取扱ノ儀ニ付ランドルフョリ申立

器械学等九人ノ者へ伝習可仕旨被仰御答申上候私義要用ノ事件ニ 付黒田次官及ヒ其他ノ御方へモ建言仕候間其御答有之迄相待申度

候

後ニ至リ相増シ候義ハ甚以不利益ト被存候謹言 尚又一級三致シ伝習候上ハ九人ニテモ廿人ニテモ一様ニ有之且ツ

六号

同上

千八百七十三年五月二十二日謹テ黒田次官へ申上候学校ニテ上等 可ヲ受ケ舎密ヲ学ヒ候趣ニテ六人試検仕候 ノ生徒試検仕候処左ノ如ニ出来仕候九人ノ内三人へ調所氏ヨリ許

田原田島田山際算術ノ内ニテ此級ニ適ス可キ容易ナル問題廿六四 月曜日ノ朝午前九時試検相始メ候所次ノ者出席致候則野村西山前

西山壱人二十一題ヲ答ヘリ島田及ヒ山際各十二題ヲ答ヘリ前田十 時間ニ書トリニテ答へ可キ旨出セリ

# 五題野村十一題原田四題

此書状ニ添テ右ノ問題差上候得共皆容易ニテ米利堅十歳ノ童ニ答

ラレ申スへク候

幾何学三角術ヲ学ヒンモノ一人モ無之ニ付勿論其他ノ試検出来不ノ朝点鼠ヲ学ヒシ歟ヲ尋候処一人乗算マテ学ヒシ趣ヲ答ヘリト此試検ヲ心得候西山壱人ハ算術ニテハ十分ノ試検ヲ受候火曜日

ラントルフ氏考候ニ生徒五人ノ者算術ニテ不十分ノ力ヲ顕シ候事

申候

テ算術ハ其初段ナリ器械学或ハ器械術ハ六七段ノ処ニ位シ候

ラントルフ氏断然申上候ニ学問ハ数段ヨリ組立ル階ノ如キモノニ

用ニ候三年モ困苦致シ登リ候上初テ六段ニ達シ器械学ヲモ学ヒ可今日在校ノ生徒ハ初段ノ者故適宜ノ師ヨリ助ラレ段ヲ登ルコト肝

七号

申候謹言

黒田開拓次官ヨリラントルフへ書翰

驚愕ス右学士ノ為スヘシト同意セル事ハ為セヨト命セラル、事ト使ニ於テ右学士カラヲハエス同意セサル事ヲ同人ノ為スヲ好マサルニ

違也而テ黒田君器械術学士撰挙ノ節英語ヲ用ヒタリ)

而テ今開拓

下ノ師授ヲ受ケンメ其上段ニ達スヘキ教ヲ施シ度此段御達申候以械学ヲ為シ得ヘキ旨委細貴意ヲ領承セリ就テハ右ノ生徒ヲシテ貴然ハ学問ハ数段ョリ組立ル階ノ如キモノニテ算術ハ其初段ナリ然然ハ学問ハ数段ョリ組立ル階ノ如キモノニテ算術ハ其初段ナリ然

八 号 上

ジョン、シ、ランドルフョリ書翰

千八百七十三年第六月三日於開拓使

手配相止呉侯様電信ヲ以テ申遣侯処右到著前ヲントロフ雇入ノ条約

黒田開拓次官ヨリ上野外務少輔へ懸合ンドルフ氏不快ヲ抱ク事アルヘカラス謹白

当使御雇教師米国人ション、

シー、

ラントロフ参著以来条約丼学科

申遣置其後本使詮議ノ筋有之器械学取建即今差扣候ニ付教師雇入ノ末ハ昨春中器械学教師御雇伺済ノ上右取計方少辨務使森有礼へ依頼引無之不得止場合右条約相罷不申テハ不叶儀ニ相至候処右雇入ノ始等ノ儀ニ付異論ノ筋有之再三説論ヲ加へ委詳事情相達候テモ何分承

「回答欠」

紙写横文等十六通相添此段及御掛合候也

六月十四日

右雇入ノ始末別紙ノ通ニ候条公法上ニ照準差支有無御回答有之度別

×

ラントルフ雇廃止ノ儀ニ付テハ兼テ御指図ノ次第モ有之調所広丈ヨ西村正六位外一名ヨリ黒田開拓次官へ書翰

慮ヲ重ネ候ヘトモ即今雇ヲ免シ候手続ニ至リ兼候ニ付何日ヨリニテ 外務少輔幷御雇顧問スミツへ種々及相談候処森氏条約書ニ基キ思

モ六ヶ月満期ニシテ雇被相止候外良策無之トノ趣ニ有之猶西村貞陽

止七月三日ヨリ六ケ月満期ニシテ雇廃止候旨別紙ノ通示令草稿スミ

ヨリ工部大輔へモ懇談致シ候へトモ同省ニ於テモ差向入用無之不得

差越候右月間中ハ条約面ニ基キ都テ器械ニ関スルモノ等ヲ為取扱候 ツへ相頼石橋外務少丞等へモ相談シ「ラントルフへ相達候処則請書

積ニ御坐候依テ為御検閲書類御廻シ申候間御承知被下度猶委細ノ義 ハ御帰京ノ上口述可仕此段申進候也

西村正六位ヨリランドルフへ往

千八百七十二年第十二月十二日ノ約書ヲ以テ御雇申候処本日ヨリ 六ヶ月満期ニ於テ貴下ノ雇相止候間此段御報知及候也 七月三日

ランドルフョリ回答

千八百七十三年第七月四日東京開拓使呈

本月三日附ノ貴簡拝受開拓使於テ千八百七十三年第七月三日ョリ 六ケ月ノ終リニ於テ約書御廃止可被成旨被仰越了承如此キ手段ニ 黒田公代理正六位西村貞陽君

御所置ト奉存候以上 立至リ候ハ最モ歎息ノ次第ニ候ヘトモ誤解ヲ結局致候ニハ適宜ノ

×

×

×

黒田開拓次官ヨリランドルフへノ書翰

術ヲ以テ実地有用ノ職人ヲ教授被致候様有之度尤モ右ニ付有礼ノ書 貴下職務ノ儀ニ付今般森有礼ヨリ書面ノ趣モ有之候ニ付器械工業ノ

翰写相添此段申入候也 此書ハ森氏へ相談相成候処同人見込ノ廉有之認直シ被相達此分取朱書 八月日欠

消ノ旨調所殿ヨリ承ル

別紙 森有礼ョリ来書ノ抜書

地用立職人ヲ教込ム丈ノ処ニ勉強セシムル都合ニ致シ置候尤文字 ラントルフ氏一条ハ同人昨夜面会談判先ツ器械工業ノ術ヲ以テ実 ハ全我国ノモノノミ西洋書籍等ハ受教人へ附セザル積り右ノ手筈

ニテ次官ヨリ同人へ被達度事

森有礼ヨリ黒田開拓次官へ書翰

可相成書面上ニ付キ聊気付ノ廉有之仍テ別紙横文更ニ賢覧ニ供度

×

黒田開拓次官ヨリランドルフへ書輸

翻訳ノ余暇無之其儘進呈委細ハ拝眉ノ時縷々可申上候也

第七拾三号

開拓使派遣留学生徒管轄に付伺

貴下当使へ勤務ノ儀ニ付森有礼氏ヨリ見込ノ趣承知致シ候右ハ貴下 ヲ委敷生徒ニ了解為致候様教論可致義ニ有之候間右目的相達候様御 於テ相働居候職人ヲ指図致候様ノ人物ニ取立可申義ニ有之尤右受教 ヲ引受器械工業両様ノ内実地ニ可相施術業ヲ教授シ以テ方今実地ニ 人ニ教授致候ニハ外国書籍不相用通辨者ヲ以テ其学フ処ノ何事ナル へ御判ノ上申越シ候儀ト被存候右有礼氏見込ノ趣ハ貴下受教人数輩

明治六年八月廿四日

開拓次官黒田清隆

段奉伺候也

致度尤御許容之上ハ右課程ニ依リ各検査致シ帰留取調可申上候条此 通ニ有之普通之規則ヲ以処分難致候儀ニ付従前之通当使ニ於テ管轄

太政大臣代理

参議後藤象二郎殿

参議江 藤 新

平殿

教諭ノ好手段御取設ケ有之度候此段及御依頼也

月日欠

汪

本史料は、編集された写本より採録した。本史料

れは本件が決着した最後のランドルフ宛書翰と関 の日付は「八月十五日」と記載されているが、こ

連するものと思われる。

[別紙]

当使差遣海外留学生徒人員

鉱山

[道〇五五一五]

クルヲ許サス

二木 彦七

魯国留学生徒

右ハ専ラ本科ヲ研究シ現術ヲ攻習シ他ノ科業ヲ以テ本科ノ進歩ヲ妨

江村 次郎 宮地堅一郎

右二名ハ専ラ本科現術ノミヲ勉励シ必シモ読書上ノ工夫ヲ要セス

仏国留学生徒

榎本彦太郎

鉱山

学生徒へ自今都テ文部省ニ於テ管理処分致シ候旨院省使へ御達相成 何分之御沙汰無之然ルニ今般陸海軍生徒ヲ除ク之外各省使差遣之留 当使差遣留学生徒処分之儀ニ付本年第三十八号ヲ以テ奉伺候処未タ

当使差遣留学生徒之儀二付伺

候処当使生徒之儀ハ毎々申上候通他ノ生徒ト違ヒ学科之次第別紙之

山口彦次郎

																		1	22
同	農学	同	同	同	農学	同	同	同	同	鉱山	ヲ奴クハヲ許サス	カライン・ボード・オログ・オログ・東京本科を研究。	司言ない事の文字の千日と	農学	鉱山	工学		右三名ハ専ラ本科現術ノミ	工学
工藤精一郎	得能新次郎	柴山 弥八	西郷菊次郎	市来 宗助	税所 長八	鮫島武之助	村田 十蔵	大山 助市	志道新之允	大和七之允	「同上」	オ三名・専ラオ科ラ研究シ男術ラヴ音シ他ノ科第ラ以ラ本科ノ進力100元(1947)	・見可,文写・し、 斗巻・人・ マー・ 生き	中島政之允	服部敬次郎	山川健次郎	米国留学生徒	右三名ハ専ラ本科現術ノミヲ勉励シ必シモ読書上ノ工夫ヲ要セス	長谷部仲彦
御沙汰無之然ルニ右生徒ノ儀ハ昨秋以来数回稟議ノ通農工鉱山等ノ	当使差遣留学生徒ノ儀ニ付本年八月二十四日相伺置候処未タ何分ノ	当使差遺留学生徒名目廃止ノ儀ニ付同	第七拾六号	7二 開邦假派遺留学生很名目廃止に代信			右三名ハ専ラ女学科ヲ勉励スヘシ				ヲ妨クルヲ許サス	右四名が専ラ本科ヲ研究シ現術ヲ攻習シ他ノ科業ヲ以テ本科ノ進步		同	同	農学	鉱山		右十一名ハ専ラ本科現術ノミヲ勉励シ必シモ読書上ノ工夫ヲ要セス
来数回稟議ノ通農工鉱山等ノ	一十四日相伺置候処未タ何分ノ	、儀ニ付伺		山に代信	二 十 可	〔道一〇七〇三〕		津田梅	山川 捨松	永井	[朱書]	「シ他ノ科業ヲ以テ本科ノ進步	フュートをリーストーを	山尾常次郎	最上 五郎	種子田清一	来原彦太郎	[ 同上]	必シモ読書上ノ工夫ヲ要セス

八三

電信生徒証書案(九月一三日)

今般開拓使官費ヲ以電信生徒被仰付候ニ付左之通御請仕候

御使之命令堅ク相守可申事

現術技業ヲ専習セシメ固ヨリ学課ノ正則ヲ践ミ全材ヲ成達セシムル

者ニ無之其実農夫工人同一ニ有之右技術卒業ノ遅速ハ拓土開物ノ成

否ニ関係致シ尋常普通ノ規則ヲ以テ拘束致候テハ不都合ニ付是迄ノ 名目相廃シ当使御用技術質問トシテ其儘在留申付候様仕度候条至急 通従事為致申度候処生徒ノ名目ニテハ御規則ニ障碍モ可有之ニ付右

明治六年九月三日

太政大臣三条実美殿

御許容相成度此段奉伺候也

開拓次官黒田清隆

(道一〇七〇三)

奥書

開拓次官黒田清隆殿

前書之通相違無之候事

年号月日

府 県 印

証書へ電信寮ニテ四週間学業勤惰人質等ニ至ルマテ試

験之上官費生徒申付候節当校ニ於テ請取候事

(間(調所)

**(1)** 

以下ノ書類函館へ相回候テハ葛藤ヲ生シ可申候条御回

\*

〔道〇五七五七〕

学校取建に対するケプロンの意見(注)

可仕事

仰付候節ハ学費毎月八円宛ノ割ヲ以テ本人或ハ請人ヨリ速ニ上納 \*

御法禁ヲ犯シ候歟又ハ電信寮御規則ニ背キ候等ノ儀ニテ退校被

> 候儀願出申間敷事 成業ノ後ハ北海道ニ偏籍シ五ケ年御使ニ従事可仕尤他へ籍ヲ移・(2018年) 修行又、従事期限中仮令大病等差起候歟或へ何様ノ事故有之候

第十二号

共退去ノ儀願出申間敷事

右之条々聊違背仕間敷依テ証書如件

当人 誰何子或へ厄介歟何県貫属 士民 歟

何 之 何十年何ケ月明治何年何月 誰

印

何県貫属士民歟

何 之 誰 印

無之様仕度候事

(印(鈴木)

八四

# 開拓次官黒田清隆閣下

千八百七十三年第九月廿二日東京呈

たる第八月六日御認之貴簡落掌せり 第六月九日十三日十五日及ヒ第七月十五日附数通の貴答として賜り

次ニ余か申述せる所を閣下想錯せられしと思ふケ条ハ教育之儀也余

而已尓て普通学又ハ予備学校の事尓ハ非す各国の学語を学ふ等の儀 取建の儀尓て之レ尓は大金ヲ以て有名の博士等を要す云々と記せる か第七月十五日の書面ニ申述せる所ハ高上なる学術を教授する学校

> る書状のみ其書面ニ千八百七十二年第九月十七日附を以て大学校は 三十日杉浦誠松平太郎両氏より七重ニ大学校取建の義ニ付掛合れた 開拓使の官員より大学小学の義ニ付余ヵ愚案を乞れたるは去歳七月

余八月十七日附の貴簡ニ就き二ヶ条を前文ニ演述せるは特ニ開拓使 未タ可ならす小学校こそ可然と回答せり

庁の公文中ニ余か云ふ所の誤りなき越残さん為のみ 连 本件の全文は『開拓使顧問ホラシ・ケ プロン 開拓使教師兼顧問ホーレシ、ケプロン

拝具謹言

報

文』を参照されたい。

〔道○五七四二〕

### 八五 女学校生徒表

ハ願はしきことなれは教授すへき也

明治六年九月女学生徒表[注]

		官費
同	第	舎
	壱	号
桶町壱丁目	第五大区小十三	宿
	区	所
同同	同 壬 九 月 月	入拝
	十八日日	校命
ntes (s	A. A	退
		校
		1
武鳥	武 東	生本
武鳥取	武東京旅府	
取	京	生本
取 県	蔵 河 野 物	生本 国 父兄引
取 県 開拓使出仕 胤	京 府 東京府権少属 野 惣十郎	生国父兄引請
蔵     千葉     一人       千葉     一人     千	蔵 河野惣十郎 河野惣十郎 河	生国父兄引請
蔵	京 府 東京府権少属 河 野	生国父兄引請
蔵 千 葉 一 胤 千 葉 震	蔵 河 野 惣十郎 河 野 悦 東京府権少属	生 国 父兄引請 氏

		* !					:	
		:	:		i	<u>.</u>		
				第四舎	同	同	第二舎	同
							舎	
	麻布工大区小七		林正十郎邸内 第二大区小二:	澄 崇 院 山 内 山 下 谷 不 五 不 五 不 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五	箱館詰	湯島六丁目 第四大区小四	四ッ谷東仲町	赤松海軍大丞神田錦町三丁
	区		区	区		ノ 区	三一丁区目	大三小 丞丁 方 目 区
一 九 月 十 九 月 十 九 月 十 八 日	同 十申 日月 日 日	同同	一同 元 月 月 十九 月 十九 日	九月十九日 同八月十八日	同 十申 日 月 九 日	同同	同同	同同
		:					退校」	
佐 静 岡 渡 県	肥態場果	同同原	武静岡	但 豊 後 馬 県		武東京府	武東京府	武浜松県
山当 使 田 仕 守	調拓 所 広	右同	大 鳥 生 生	金開 拼使出住	斎 藤 英 世 出仕	斎平 平 藤 万	小士族林	山 伯 知 田 昌 昌
曖	丈	二人	介	之	俊	松	彰	邦
Щ	田母	大	大	金	神	斎	小	向
<b>H</b>	神神	鳥	鳥	并	尾	藤	林	坂
皆	皆喜曾		雪	倉	栄	琴	鋭	鉄
女	女	女	女	女	女	女	女	女
十二年	十一年五ヶ月 明治六年九月	十二年八ヶ月 明治六年九月	十一年明治六年九月	サニ年九ヶ月 明治六年九月	十五年四ヶ月 明治六年九月	十六年四ヶ月		十四年八ヶ月

						-		
芝浜松町二十五番地第二大区小三ノ区	第館・フー・小区	下谷練塀小路四拾六番地	牛込改代町伝久寺前第三大区六小区	元飯田町壱丁目第三大区小四区	牛込南町三番地第三大区五小区	箱館	四ツ谷箪笥町第三大区小九ノ区	赤阪田丁六丁目第三大区小十四区
十月十九日 一十月十八日	同 十月 九日	同 九月 十月 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日 日	同同	一 九月十九日 一 八月十八日	五 元 元 月 十 八 月 十 八 日 十 八 日	同 日 十月 九日	同同	同同
		二日退校」					,	
武佐賀藤県	商北海人道	武静岡隊県	渡京府	武浜松県	武 東 京 蔵 府		武東京府	武 東 京
福 島 徳太郎	丸 山 藤兵衛平民	名村元	渡 辺 敬 t	加開拓使出出品	大越漠	中山 克 地	高野 寛	水 谷 寛 铝
		度	忠		洋	忠	裕	得
福島	丸山	名村	渡辺	加地	大越	中山	高野	水谷
照	政	初	浚		菊	涼	劉	益
女	女	<sub>(</sub> (	女	喜代女	女	女	女	女
十六年四ヶ月	カ年十一ヶ月		明治六年九月	明治六年九月	十四年一ヶ月	明治六年九月	明治六年九月	明治六年九月

	<u> </u>				· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·			
				-				
İ		-						
松平容大邸内第二大区小二ノ区	松前従五位邸内 下谷三味線堀 内	芝森元町二丁目第二大区小七ノ区	北村勝吉方富士見町四丁目	市ヶ谷片町第三大区小九区	軍医寮内 第三大区小一ノ区	第四大区小三ノ区	林正十郎邸内第二大区小二ノ区	大洲加藤門下谷和泉橋通青石横丁下谷和泉橋通青石横丁
同 同	同同	同同	同同	同 同	一	同 同	同同	同同
八日被差許」								
武青森県	武東京府	肥佐賀県	下解線	武東京府	武静岡陽県	武東京府	武静岡県	武静岡県
山田貞助	给 木 熊 六	吉村高種	平 田 景 行	三 須 元 好	三龍一	水 野 義 郎	荒 井 郁之助	広 瀬 秀 雄
Д Ц	鈴	吉	平	111	=	水	荒	広
田田	木	村	田	須	浦	野	井	瀬
直	亮	清	登勢女	登志女	都2	民	常	常
女	女	女	女	女	女	女	女	女
	十一年七ヶ月明治六年九月	九年十一ヶ月明治六年九月	十四年七ヶ月	十五年十明治六年九月	十四年四ヶ月明治六年九月	十六年六ヶ月明治六年九月	十五年七ヶ月明治六年九月	十六年四ヶ月

	,							
林正十郎邸内 第二大区小二ノ区 の の の の の の の の の の の の の の の の の の の	余市移住		余市移住	白石村住人	伊丹保正大区小五ノ区	第三ノ五小区		
五月十九日 元月十九日		同 同	同同	同 十月 日 九 日	一 一 一 一 一 一 一 一 一 八 月 十 八 日 十 八 日 十 八 日 十 八 日 十 八 日	同同	同同	同 明治五日 九日
武新治	青森県	森幌		貫 開 拓 属	武静岡岡県		同	箱館詰
椿 開拓使出仕	中山 治右衛門	宗 川 茂 友	古 沢 幸三郎	管 野 宣 民	大 木 清次郎	願乗寺 法 恵	松川直亮	斎 藤 英 俊
椿	中	宗	古	菅	大	願乗寺	松	神
淑	山伊	松	沢稲	野岩	木錦		労	尾春
女	伊代女	女	女	岩代女	女	登袮女	女	女
十五年五ヶ月	十四年五ヶ月	十六年	明治六年九月	十四年十ヶ月	明治六年九月	明治六年九月	サ三年二ヶ月	十三年 用治六年九月

			:					
		,			余	 余		永第 田三
				自石住	余市移住	余市移住	斎藤屋源二郎方 下谷美倉橋佐久間町 第五大区小三区	田丁二丁目五番地所二大区小五ノ区
一 六 同七年	六同七年	六同七年			壬		同 壬	
同七年 月 五二 日日	同七年   月   三日   日	同七年 月 一日	同同	同同	壬申 同十月 九日	壬申 一月 九日	一 九月十九日 一 八月十九日	九同 月 日 日 日
								依願退校」
		薩尼島県	札 幌 詰	開 拓 使	青森県	青森県	武松水水	肥 佐賀県
藤井三郎	高橋 垣	調 所 広 丈	国 吉 篤 明開拓使御用掛	羽部篤行	上田又作	岩 田 助三郎	寺 沢 正 明	吉 武 功 成
· 今	高	調	国	- 羽	上	 岩	<del></del>	———— 吉
村	橋	所	吉	部	田田	H	沢	浜
止 幾 女	保 女	岩女	基 女	艶 女	辰 女	美恵女	嬀 粛 女	梅女
		十一年九ヶ月明治六年九月	九年二ヶ月明治六年九月	十二年九ヶ月明治六年九月	十一年七ヶ月	十二年四ヶ月明治六年九月	十二年五ヶ月明治六年九月	

一六日入校明治六年九月 三十一日入校明治六年八月 一日入校一月 同上 同上 同上 同上 斎 藤 忠二郎 町士族 町土族 金御札幌平民 井上 新左海三区蔵町 相良 正勝平民 正勝 小 小 西 西 新左衛門 弓 克 弥 弥 娘 忠 蔵 蔵 男 新井田 斎 斎 古 相 金 田 藤 良 沢 中 藤 田 美由女 津 貞 栄 だい女 龍 波 宇 女 女 女 女 明治七年一月 明治六年九月 十一年四ヶ月 明治六年九月 十三年二ヶ月 明治六年九月 十二年三ヶ月 明治六年九月 十一年四ヶ月 明治六年九月 十二年三ヶ月 明治六年九月 九年四ケ月 八年十ヶ月

[注] 表中朱筆によるものは「」で示した。

## 八六 内藤誠太郎より開拓使留学生願出に付問合

之事拙者之力ニ及ひ兼候条可然御見込モ有之候ハ、何様ニか御工夫 使派出留学生処分之儀夫々伺中未御指令モ無之場合ニ付新員増加等 米国在留内藤誠太郎ョリ別紙之通依頼申越情実可憐次第ニ候得共当

之処及御依頼候也 明治六年十月四日

黒田清隆

森有礼殿

[別紙一]

次第之訳故旁御憐察を以何卒宜敷様御配慮之上何分之御答奉企望候 既ニ当学校之畑ニ而仕事を見出シ此往之学費金を用意之為め働申侯 ョリ帰朝之命有之時ハ自力を以今暫く之間留学仕覚悟ニ而当休暇中 至極恐入候得共別紙願之筋急速御周旋伏而奉祈候如何ナレバ文部省

内藤誠太郎

黒田様閣下

[別紙]]

西曆一千八百七十三年八月五日

米国マサチユセツアモスト

マサチユセツ大農学校留学生

内藤誠太郎

今般文部省ヨリ帰朝之命相下候由誠以驚歎之至ニ候未ダ詳ナル達シ 無之候故更ニ其故を不存候得共不日判然帰朝之命至ルハ無疑候折角 然後官費留学生奉命仕今日ニ至ル迄精神を凝シ修業罷在候処豈計哉 を以英学修行致シ候而昨年秋当大学校之試験を経テ本科ニ入級致シ 御存之通リ私義森少辨務使之僕従トシテ当国ニ来リ其後森氏之許可

迄御仕送り相成此往キ益拓地殖民ニ御手を付ラレ候と奉遙察候ヨリ 進ミ月運び就而ハ此業ニ長ジタル人を御登用ノミナラズ海外留学生 ニ悲歎之至リニ候嘗テ承知仕候ニ北海道開拓使盛大ニ其業を被建日 処不計モ今日帰朝仕候而ハ万事泡沫ニ属シ第一国之為第二身之為実 之学科悉ク研窮致シ他日帰朝之後我学びタル所を以尽力報国致度候

三等級ニ昇級仕候ニ付今ヨリ三ケ年之後当大農学校ニ於テ教ユル処 是迄勉強仕既ニ当大学校之初等之学科を学済致シ当夏試験済之上第

開拓使外国留学生之中ニ被加候様偏ニ奉願上候然時ハ卒業之上ハ早 此段御洞察及ビ幸ニシテ森辨務使モ在朝ニ付御聞正シ之上拙者義を シテ至極恐入候得共拙者此迄農学拓地ニ志シ当大学校ニ入校仕候間

奉希上候謹言

速帰朝仕北海道開拓之為ニ我及ぶ丈ケ尽力仕度候間何卒此段御許容

黒田開拓次官閣下

#### 付 右に付回答

### 開拓次官黒田清隆殿

申進旨本月四日付を以て御懸合之趣委曲承知いたし御使御入費多端 米国在留内藤誠太郎開拓使派出之留学生願立之一条二付僕之見込可

直」才能へ「秀常」但シ非常鋭敏と者申シがたし勉力へ甚強ナリゆ へ尔成業者間違ナシと存候平生之専念農学ニアリて既ニ三ケ年程米

之折柄申進兼候得共同人性質才能等ニ至而者僕飽迄存知性質ハ「厚

国マサチユセツト州大農学校ニ入り当今第三等ニ上リ居今二ケ年も

徒を引立米国内数百之学校中尔て高名之学校ナリ湯地野村之両氏能 経候得者成業ニ至るへく此学校ニおひてハ学術現業を主トいたし生 八百金之学資を給セられ成業候後ハ七ケ年或者十ケ年間開拓使之御 ク存知有之候右之次第候ゆへ可相成者今二ケ年或ハ三ケ年間毎年七

ク存候右御紙面之趣ニ応シ恭答如此

明治六年十月十日

**尓及ハす御使之方ニおひて御得分別而多ク彼是御国益可相成儀疑ナ** 用可相勤旨之約束を為さしめ候様御取計相成候得者当人之幸ひ者申

内藤誠太郎留学学資に付問合

十ノ第七十八号

施行スヘキノ時ニ至リ同省へ協議処分候様致度此段上陳仕候也

有礼

曲御答之趣致承知候右ハ当時マサチユセツト州大農学校へ寄留致居 米国在留内藤誠太郎当使管轄生徒願立一条二付過日及御頼談候処委

候趣就而者学費一ケ年七百金ニテ同校ニ於テ修行差支無之候哉一応

六年十月十四日

及御問合候至急御回答有之度候也

黒田清隆

〔道〇五七四一〕

森有礼殿

八七 文部省伺北海道学事着手の儀下問に付答議

第九拾三号

文部省伺北海道学事着手ノ儀御下問ニ付答議

設有之漸次学制ニ依循可致見込ニ候得共現今悉其成規ヲ蹈候テハ実 場合ニ至リ不申尤函館ニ中小学其他有珠与市二郡ヲ始各所ニ郷黌 使民政ニ於テハ専ラ其産業督励ヲ主トシ未タ他府県同様学務施行ノ 生計ノ道モ未タ十分ニ相立不申過半ハ官ノ扶助ヲ仰キ候者ニ有之当 北海道学事着手ノ儀文部省伺ノ趣熟議致候処彼地開拓創業已来逐年 地差支ノ廉不少且本庁幷当出張所学校ノ儀ハ兼テ申上置候通農工等 人民繁殖ニ及候得共皆移住ノ人民各処へ土着各山野ノ業ヲ営ミ居其 ノ現術ヲ教習シ自ラ別途ニ属シ候儀ニ有之因テ管内教育ノ事ハ一般

[別紙一]

上等上

銀時計鎖付

壱箇

壱人ニ 付

八九

ンとの対話

当校出板英和辞書

壱冊 壱箇宛

明治六年十二月三日 開拓次官黒田清隆

中等下

西洋蝙蝠傘

下等上

「北海道一般へ学制施行之節へ総テ文部省へ協議ノ上可取計事[集書] 明治六年十二月廿二日」

右大臣岩倉具視殿

(道10七111)

右歳末大試験ニ付生徒へ褒賞トシテ被下置候品右之通確定仕度此段

下等下 フラネルシバン

フラネルシバン

壱枚宛 壱枚宛

壱枚宛 壱本宛

八八

仮学校大試験賞与品に付伺

次官化押(黒田)

五等出仕(印(西村)

卿(內海)会計課卿(桑山)卿

卵(調所)学校卵(森)卵(柳田)卵

七等出仕卿(安田) 卿(時任)

相伺候也

六年十二月

教授掛印(山田昌邦)印(下山)印

校長⑪(調所)

[別紙二]

大凡見込

上等上分 七人分位

中等下 七人分位

物品数前広用意仕置申度若其時ニ当リ増減等有之候ハ、夫々取計可

当歳末男生徒大試験済之上賞典取行候分凡別紙之通見積申候依テ右

申此段相伺申候也

六年十二月十一日

下等上

上等下分

四人分位

七人分位

中等上 七人分位

下等下 十人分

女学校教師に付黒田次官とオランダ領事ホートウィ [農〇一一]

明治六年十二月十七日教師館応接所ニ於テ黒田次官和蘭領

事ホートヰン」ト対話ノ略

無去十五日御面会被成度旨御中越之処右書翰取扱候者失念致居遂ニ

回答遅刻相成甚タ遺憾ニ候且先般御申越之折ハ我政府之繁用中ニテ

西洋図引道具 西洋蝙蝠傘

銀時計鎖付

壱組

⑪ツワーテル」ノ儀ニ付兼テ山内君マテ申入置候通明年ハ

為致度候処跡教師ノ儀ハ別ニ御雇入ノ御思召ニ可有之哉

縁組

ト存候

引移ス事へ相成間敷候得共成ルヘキ丈ハ左様致度候

此校ハ教授モ能ク行届キ生徒モ殊ノ外速ニ進歩候趣伝聞仕候処

全ク御談之通ニ候女学校ニテハ我国ノ第一等ニ候

如何ニ候哉

閣下之御心労御祭申上候且又拙者ニ於テモ大慶之至存候夫ニ付

一応相願申度儀有之「ツワーテル」ハ縁付タル上北海道マテハ

素ヨリ教師モ生徒モ引移ス筈ナレトモ「ツワーテル」縁付タル上ハ

其折ハ女生徒モ教師モ御移シ可相成哉

当校ハ素リ北海道ノ為ニ設ケタレハ到底彼地へ引移スヘキ筈ナレト

モ夫々学校築造等ノ順序モアリ来年中ニハ迚モ引移シガタカルヘク

苦情ヲ申立甚タ困居候

師ヲ雇ヒ居リ候処同国ニテモ宗旨ノ違タル人ヲ一処ニ置候得ハ彼是 ル時へ矢張ツワーテル」ヲ頼置候方都合宜ク候当使ニテモ数名ノ教

何レ此儀ハ熟議ノ上書面ニテ御依頼致スヘク候

益ニ可有之ト存候

閻ミ難渋ノ趣モ有之候間御雇ノ儀御託シ相成候ハ、何分尽力可〔ママ〕

ツワーテル縁付外宅スル上ハ「テロイトル一人ニテ諸入費モ相

又ハ明後年マテモ其表ニ建テ置レヘキ哉可相成ハ御思召ノ程内

仕ト存候

ツワーテル」通ナリトモ跡教師ノ来ルマテ教授之差支ナキ様致度候

イトル」モ敢テ米人ニ劣リタル訳ニモ有之間敷且又此校ハ来年 至極御尤ニ候英語ノ為ニハ米人ノ宜キト申ハ御尤ニ候得共テロ

々相伺度候

御尤ノ事ニ候得共前ニ申述候通真之英語ヲ企望スル上ハ米人ヲ雇フ

参兼可申且尊意之通他国人ヲ加へ候テハ宜シカル間 敷 依 テ ハ

語ハ米人ノ如キ出来不申モ他ノ学問ハ必ス優等ノ者ニ候間御利

「テロイトル」ノ友人ヲ招キ被相雇候テハ如何可有之哉縱令英

事ノ取扱モ可有之何レ同人ノ心中相尋タル上可申上ト存候

至当ニ候得共他国ノ人ヲ加ヘ万一葛藤ヲ生シ候等ノ障害ヲ比較ス

候ハ、都合モ宜シカルヘクトモ考居候

御思召ノ程ハ至極御尤ニ候得共ツワーテル縁付タル上ハ夫々家

米人ノ方可然存候得共他国ノ人ヲ入込テハ居合如何ノ考モ有之依テ テハ米国ヨリ雇入可申哉ノ内評モ有之尤モ当校ハ英語ヲ専ト致候故 ツワーテル縁付タル上ハ「デロイトル」一人ニテハ間ニ合申間敷依

「ツワーテル縁付タル上モ毎日幾時間トカ取極メ通ヒニ教授致呉

当庁へモ出頭相成兼居候場合乍不本意毎々御断申入候今日ハ緩々御

話可相伺卜存候

其係ノ者へ可申付候

必ス御差支無之様可仕尤モ跡教師之来ルマテハ一寸モ動サ、ル

様可致候間跡御雇入之儀至急ニ御取極被成下度候

其事タニ取極リタル上ハ即答致候テモ宜ク候得共何レ書面之方間違

多クハ娼芸妓ノ類ニテ更ニ婦道ヲ守ラサル故出生ノ子供モ必ス賢良 道ノ人民元来ノ風習ヨロシカラサルノミナラス内地ヨリ移住ノ婦女 ナシニテ宜ク候間両三日中御回答可仕候且此校ヲ設タル所以ハ北海

上ニモ正実ナル教師ヲ企望致シ且ツワーテル等ハ生徒モ大ニ懇ニ相 域ニ導キタキ企ニテ政府ヲ之ニ同意シ専ラ今日ノ施行ニ相成候間此 ナルヲ得ス故ニ此校ニテ仕立タル女生徒ヲ以テ北海ノ人民ヲ開化ノ

成リタレハ今更手放候ハ誠ニ惜ムヘキ場合ニ候

至極御尤ニテ人民ノ賢否ハ実ニ父母之教育ニ因リ候儀ニテ北海

道ノ御急務ニ候得共中々年月ヲ要シ一方ナラサル御心労ニ御坐

此校ニアル生徒カ児子ヲ産ミ其子供カ成長シタル上ナラテハ効験相

顕レ申間敷候

次ニ些少ノ事ナレトモ女教師ノ申聞ナレハ相願申候学校ノ内西

方ノ坐敷内薄キ板ノ上ニ帆木綿ヲ敷キタル儘ナレハ中々寒ク

膝ヨリ下ハ冷徹ニ耐 ,申候然ルニ生徒モ不便ニ候間日本ノ畳ニテモ御敷キ被下度候 ヘサル趣ニテ女教師へハ私ヨリ熊ノ皮ヲ送

取計被成下度候

且又木羽屋敷ノ処有之昨夜ノ火事ニモ心痛罷在候趣是又可然御

前同樣可申付候

了リテ鉱物等ヲ展覧セリ

〔道〇五七四二〕

大試験末式次第

九〇 明治六年十二月廿四日三番講堂ニ於テ大試験末之式ヲ行フ左ノ如シ

次官殿始平服ノ事

但校長独小礼服着ノ事

第一 午前第八時五十分校長及教員三番講堂ノ橋ニ着ク 午前第八時五十分生徒一同三番講堂二整列

第二

午前第九時次官殿始奏任官校ニ入ル校長教員及級長迎テ正面

第四 椅ニ着カシム此時一同立礼 次ニ各生徒学業ヲ初ム其目左ニ

作文 二級共 綴字

二級共

筆跡 級級

二級

論理 訳

長沢猪三郎 浜辺暢美 山本盛実 伊東一 隆

西山正吾

漢学 嶋田純一

第五 次二校長教員及ヒ級長次官殿ノ前二進ミ礼ヲ諫フ 右業終テ校長生徒学業之賞ヲ行フ

第七 次ニ教員及ヒ級長校長ノ前ニ進ミ礼ヲ諫フ[陳カ] 次ニ次官殿始退去校長教員及ヒ級長其席ヲ送ル

次ニ校長教員席ヲ去ル級長送ルコト前ノ如シ

次ニ生徒一同列ヲ正シ席ヲ去リ各其舎ニ着ク

第十一

以上

タル可キ事

六年十二月廿二日

但当使官員之内御用之都合ニ依リ試験之席ニ臨ミ度者ハ勝手

〔農〇〇七〕

開拓使派遣海外留学生帰朝すべき旨達

九二

開拓使派遣女子留学生帰朝に及ばざる旨達

九

開拓使

差遣ノ生徒而已別途ノ処分難相戍候条兼テ相達置候通渾テ同省ニ於 理ノ儀相達候処其後艛々陳述ノ趣モ有之一応無拠相聞へ候得共其使 先般陸海軍生徒ヲ除ノ外各庁ョリ差遣ノ海外留学生一般於文部省管

テ管理セシメ猶詮議ノ次第モ有之各庁ヨリ差遣ノ分共一般帰朝可申

付旨別紙ノ通同省へ相達候条此旨可相心得事

明治六年十二月廿五日

但帰朝旅費ノ儀ハ文部省へ可送致事

太政大臣三条実美

別紙

其省管理海外留学生徒詮議之次第有之悉皆帰朝申付候条於其省夫々 文部省

処分可致此旨相達候事

但従前各庁より差遣之分帰朝旅費之儀ハ該庁ヨリ請取送達可取計 レ候者へハ旅費不賜候条此旨モ兼而通達可致尤自費ヲ以テ滞留願 就而ハ本件当人へ相達候上六十日以内ニ必出発可致若右期限相後

出候者へ不在此限候事

明治六年十二月廿五日

太政大臣三条実美

[道一〇六九五]

開拓使

海外留学生徒詮議ノ次第有之悉皆帰朝申付候旨文部省へ相達候処左 ノ女生徒ノ儀ハ追テ相達侯迄不及帰朝侯条此旨相達候事

明治六年十二月廿五日

太政大臣三条実美

津田梅女 山川捨松女

永井繁女

承知候也

〔道一〇六九五〕

九四

開拓使官園例則

(綱領、

官費生徒取扱定則、

官費生徒規

則

証書案)(六年カ)

医学校廃止に付掛合

札ノ第拾三号

松本大判官殿

安田定則

開拓使官園例則

開拓使農業課例則

衣食へ民生一日モ不可欠モノニシテ其方法技術日々ニ之ヲ講明シ其

ニ招キ生徒ヲシテ専ラ実地ニ就キ現術ヲ学ハシム術精シク業成ルニ ヲ教へ又官園ヲ設ケ和洋各種ノ牛馬羊豚蔬卉類ヲ養蓄シ教師ヲ海外

精微ヲ究メサル可カラズ故ニ本使既ニ学校ヲ建テ、農工鉱ノ諸学科

墾闢シ将サニ全道人民ヲシテ凡百ノ需他邦ノ資ヲ仰カザラシメント 及ンテハ漸次之ヲ北海道ニ移シ益之ヲ拡充シテ以テ榛莽未開ノ地ヲ ス苟モ此業ニ従事スル者宜ク其意ヲ体認シ勉励刻苦以テ開拓ノ盛業

ヲ賛クヘシ今例則ヲ設クル左ノ如シ 官費生徒取扱定則

間今一応御熟議有之度旨次官殿被申聞候此段更ニ及御掛合候也 之御見込承知致度儀ニ有之決シテ御入費上ヨリ起見候儀ニハ無之候 多少ニ不拘縦令と四五人ナリトモ尚教育施行可致因テ右等之処実地 他方より撰挙可然併今後同校之弊習ヲ一洗シ其実挙ルトキハ生員之 設ハ有名無実ニ属スヘキニ付当使ニテハ医学相廃シ医生入用ノ節ハ 不待固ョリ完備ノ材ヲ不得候而者実用ニ難供次第ニ有之畢竟同校ノ テハ生徒学業ノ進歩無覚束尤医道ハ人命ニ関係シ其至重ナルハ論ヲ 致承知候然ルニ右及御商議侯旨趣ハ同校之儀規則モ十分ニ無之由付 先般其表医学校廃校之儀及御商議候処十二月三日附ヲ以御回答之趣

明治六年十二月廿七日

追而御書面末段学校ノ廃興御詞令ハ本使長官ヨリ御渡云々正ニ致

植農具器械等ノ数科ヲ分チ実地ニ就テ之ヲ学ハシムル事 生徒ハ十五歳以上ノ者ヲ択ヒ身体ヲ検査シ然ル後入園ヲ許シ牧畜耕

農業課官員ノ中特ニ生徒取締ヲ置キ其勤惰ヲ監視スル事

〔道○五五五五〕

第三条

生徒課業ノ細目へ課長幷取締時々雇入教師ト商議シ之ヲ指揮スル事

第四条

成業ハ大抵五箇年ヲ以テ定限トス然レトモ其業ノ練熟スル者ハ定限 ニ満タサルモ之ヲ選用スヘキ事

生徒成業ノ後五箇年ハ開拓ノ業ニ従事セシムル事 第五条

サシメ之ヲ許スベシ然レトモ懶惰ニシテ成功ナキ時ハ再ヒ公務ニ 但従事年限中ト雖トモ自費ヲ以テ目的ヲ定メ方法ヲ立テ北海道ニ 土着シ開墾ノ業ヲ営セント欲スル者ハ正確ナル引受人ノ証書ヲ出

就カシメ自業年月ヲ除キ前後月数ヲ通計シ定限ニ充タシムル事

第六条

生徒ハ其業ノ精粗勤惰ニ因テ等級ヲ改定スル事 第七条

課業時間ハ日ノ長短ニ因テ掲示スル事 第八条

官費生徒規則

生徒入園ノ節ハ本人引受人連署ノ証書ヲ差出サシム可キ事

生徒疾病アレハ医薬ヲ給与スル事

第九条

第一条

定則ヲ守リ課業ヲ勉励シ課長取締及教師ノ指揮ニ背ク可ラサル事

第二条

課業ノ時限ヲ愆ル可ラサル事

第三条

課業中許可ヲ経ス猥リニ其場所ヲ離ル可ラサル事

第四条

居室内ハ務メテ清潔ヲ要シ衣服器具ヲ狼藉シ障壁ニ戯書ス可ラサル

事

第五条

事

定式休暇並浴湯ノ外他出ヲ許サス尤他出ノ節ハ門限ニ後ル可ラサル

第六条

凡テ教師ノ差図業務緊要ノ件ハ之ヲ筆記シ取締へ差出ス可キ事

第七条

疾病アル時ハ取締へ届出医員ノ診察ヲ受ク可キ事

添工其管轄府県ノ添書ヲ以テ可願出事 父母ノ看病ハ其情実ニヨリ差許スト雖トモ親戚ヨリ医師ノ容体書ヲ 第八条

第九条

仰付候節へ修行中ノ給料本人或へ請人ヨリ速ニ上納可仕事

御法禁ヲ犯シ候敗又ハ園内ノ御規則ニ背キ候等ノ儀ニテ退園被

成業ノ後ハ五ヶ年御使ニ従事可仕事

開拓次官黒田清隆殿

毎月四回式日ヲ定メ農業緊要ノ事務ヲ教師ニ質問講習スヘキ事

第十条

右之条々堅可相守者也

入園ノ節ハ雛形通リノ証書可差出事

明治六年十一月

証書案

今般農業現術修行被仰付候ニ付左之通御請仕候

園中之御規則堅ク相守可申事

開拓次官黒田清降

前書之通相違無之事

年号月日

明治何年何月何日

右之条々聊違背仕間敷依テ証書如件

誰何ノ子或へ厄介何県賞属士族平民

当人何之誰

印

共退去ノ儀決テ願出申間敷事

修行又ハ従事期限中仮令大病差起候トモ又ハ何様ノ事故有之候

何県貫属士民

請

人何之誰 印

> 何 [道〇五七五六] 府 県 印